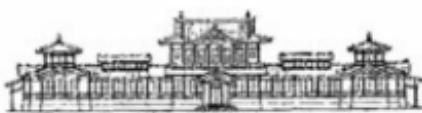


奈良国立文化財研究所年報

1 9 6 1



奈良国立文化財研究所

目 次

| | |
|------------------|----|
| 序 | 1 |
| 緒言 | 1 |
| 研究の歴史と現状 | 2 |
| 昭和35年平成2年総括研究報告書 | 3 |
| 昭和35年平成2年総括研究報告書 | 4 |
| 昭和35年平成2年総括研究報告書 | 5 |
| 昭和35年平成2年総括研究報告書 | 6 |
| 昭和35年平成2年総括研究報告書 | 7 |
| 昭和35年平成2年総括研究報告書 | 8 |
| 昭和35年平成2年総括研究報告書 | 9 |
| 昭和35年平成2年総括研究報告書 | 10 |
| 昭和35年平成2年総括研究報告書 | 11 |
| 昭和35年平成2年総括研究報告書 | 12 |
| 昭和35年平成2年総括研究報告書 | 13 |
| 昭和35年平成2年総括研究報告書 | 14 |
| 昭和35年平成2年総括研究報告書 | 15 |
| 昭和35年平成2年総括研究報告書 | 16 |
| 昭和35年平成2年総括研究報告書 | 17 |
| 昭和35年平成2年総括研究報告書 | 18 |
| 昭和35年平成2年総括研究報告書 | 19 |
| 昭和35年平成2年総括研究報告書 | 20 |
| 昭和35年平成2年総括研究報告書 | 21 |
| 昭和35年平成2年総括研究報告書 | 22 |
| 昭和35年平成2年総括研究報告書 | 23 |
| 昭和35年平成2年総括研究報告書 | 24 |
| 昭和35年平成2年総括研究報告書 | 25 |
| 昭和35年平成2年総括研究報告書 | 26 |
| 昭和35年平成2年総括研究報告書 | 27 |
| 昭和35年平成2年総括研究報告書 | 28 |
| 昭和35年平成2年総括研究報告書 | 29 |
| 昭和35年平成2年総括研究報告書 | 30 |
| 昭和35年平成2年総括研究報告書 | 31 |
| 昭和35年平成2年総括研究報告書 | 32 |
| 昭和35年平成2年総括研究報告書 | 33 |
| 昭和35年平成2年総括研究報告書 | 34 |
| 昭和35年平成2年総括研究報告書 | 35 |
| 昭和35年平成2年総括研究報告書 | 36 |
| 昭和35年平成2年総括研究報告書 | 37 |
| 昭和35年平成2年総括研究報告書 | 38 |
| 昭和35年平成2年総括研究報告書 | 39 |
| 昭和35年平成2年総括研究報告書 | 40 |

目 次

| | | | |
|------------------------|----|----------|---------------|
| 諸 言 | 1 | 唐招提寺金堂 | 内部全景 鶴尾 正面西半部 |
| 唐招提寺総合調査概要 | 2 | 平城宮跡出土木簡 | 内部装飾 虹梁下面菩薩像 |
| 昭和35年平城宮跡第3、4、5次発掘調査概要 | 18 | | |
| 頭塔の実測調査を了えて | 28 | | |
| 影刻の調査と研究経過 | 35 | | |
| 昭和35年度調査研究概要 | 38 | | |
| 奈良国立文化財研究所要項 | 40 | | |

奈良国立文化財研究所年報 1961

発行年月日 1961.10.25 編集・発行 奈良国立文化財研究所 印刷 共同印刷工業株式会社



平城宮跡出土木簡 五種 1:1.5

内部の装飾

虹栄下酒呑童子二種

唐招提寺金堂

東方瑞光

西方瑞光

正面西半部

唐招提寺金堂 内部全景

緒 言

奈良國立文化財研究所も開設以来もう九年経つた。そんなに長い歳月ではないが、ちょうどとより遡つてみると、この九年の間に案外多くの調査や研究をしているのに驚く。その主要なものは毎年出版される奈良國立文化財研究所学報（既刊十冊）に収められているので、その大様を知ることができるが、その他のものは、あるいはその研究がかなり永年に亘つて、まだ発表の機会に恵まれないとか、あるいはその研究があまり地味すぎて、なかなかふつうの出版物として出し難いとかいったような理由で、いまなお各研究室にねているものがかなりある。もちろんそれ等のことも一応は今までに発行された三冊の奈良國立文化財研究所年報に報告されているが、やはり報告は報告だけのことにつづつて、そのほんとうの内容なり価値なりについては、まだほとんど世間に知られていないのが現状である。そこで本三十五年度の年報では、いままでの各研究室の報告をもうすこしうしくすると共に、その一部をいく題の論文形式にまとめて、とにかく当研究所の仕事の大様を見るべくひろく、わかり易く報告することにした。しかしこれ等の各報告は、なんといつてもひじょうに限られた紙数の中で書かなければならぬものであるから、その実際の調査ではゆうに數年を費したような社寺のことも、ただその社寺の名称だけをかけたに過ぎないところが多く、あるいはその研究対象になつた社寺としては物足りなく思われるところがあるかも知れないが、それはまた他日を期したいと思う。

なおこれは何も本三十五年度だけに限つたことではないが、当研究所が平城宮跡発掘調査その他の調査なり研究なりをおこなうに當つて、奈良の平城宮跡関係の方々や、また各地のたくさんの社寺関係の方々に心からなる御協力を得てることは、国の文化財保護政策の上にどんなに大きな力になつてゐるかしれないと思う。しかしながら國の文化財のことはまだまだこれからしなければならないことがたくさんあるのであるから、なお今後一層の御協力をお願ひしたいと思う。

昭和35年度平城宮跡第3・4・5次発掘調査概要

建造物研究室・歴史研究室・考古学古文書

昭和35年度における特別史跡「平城宮跡」の発掘調査は、3次から5次に及んだ。第3次調査は、発掘調査事務所建設予定地の調査で、4月1日から5月14日におたり園有地内の東北隅の地点⁷、アーチルを調査した。第4次調査では、通称一条通りの北側で第2次調査地域の東側にある水田2haアーチルを7月9日から10月20日までに調査、第5次調査はさらに東方へ進んで、第4次調査地域と道路をへてた14.5haアーチルの水田地域を11月21日から3月10日にわたって調査した。通算すれば、總発掘面積2haアーチル、調査日数150日となる。

第3次調査

現場事務所建設予定地では、大正13年の平城宮跡保存整備工事の際、敷地東辺で、中央に角納穴のある方45cmの凝灰岩小礫石が、南北に2列になつて5個発見されている。しかし礫石の大きさが極めて小さいこと、その配置間隔も欲しいことなどから、これがどのような建物の遺跡であるかは全く予測し得なかつた。今回の調査は、これらの礫石を回復の柱石に再確認することから始めた。そのうちの最南の礫石は、戰時中の園有地内の耕地化のため破壊されたらしく、わずかに断片が残るばかりであつたが、他はよく保存されていた。そこでこの附近を精査すると、

これらの礫石に対して、2.6m西に方60cmの凝灰岩礫石の嵌入つけ痕跡が、根固石をともなう振りかたによつて5個所見された。さらにその西2mには、凝灰岩切石で構築された車40cmの溝が南北に通つていた。検出された礫石跡は大きさもかなりあり、柱間寸尺は街行約4m間隔であるから回廊の如きものと考えられ、西方の溝は回廊溝として適当である。するとさきの2列の小礫石を中心にして、現在道路となつている東の部分にも同じように根固石をともなう凝灰岩礫石列と凝灰岩切石溝があつたと考えられたが、いにく礫石列にあたる所は、大正年間の史蹟保存工事で作られた周溝によつて破壊されており、雨落溝は道路の中央に当つているのでいすれも調査するに至らなかつた。この東西を筋で限り、基壇上の根固石をともなう礫石を回廊の柱石にあて、中央2列の小礫石を梁垣の柱石とみれば、「年中行事絵巻賀円の圖」にみるような梁垣の両側を縦とした一種の複廊が想定される。すなわち、梁間26尺(7.8m)軒行柱間寸尺13尺(3.9m)の複廊で、普通ならば連子窓が連続する地下柱通りを巾5尺程(1.5m)の厚い土塀とした形式で、築組脚とでも呼ぶべきものである。

この廊の西では3棟の獨立性の建物を発見した。東の建物は、東間2間の南北様で、桁行は南よりの4間分を確認したが北妻は調査区域



第1図 第3・6次発掘実測圖

外に延びていって、全長を知り得なかつた。柱間は3mの等間である。他の2棟は、南北に並列して建てられた7間×4間、9間×2間の東西棟の建物で、前者は5間の身舎の4面に庇をもつものである。この2棟の建物には、中央柱下通りに浅く小さい掘立柱の掘りかたがあつて床東の痕跡ともみられ、とも

に床張りの建物と推定した。柱は残存する柱根では径35cmほどである。

ところで掘立柱の掘りかたから見ると、この2棟の建物は、最初桁行梁行ともに3m等間の9間×4間の建物の前面に、同じ柱間の9間×2間の廊道を配置する計画であったとみられるが、此の建物では、東西両端の掘りかたに柱をたてた形跡がなく、途中で計画の変更があ



第2図 葉 研 団



第3図 7間×4間建物 基3次発掘調査

つたらしい。それは身命にあたる柱行5間分の柱間を3m等間にひろげ、周間に3m等間の廊を廻して柱行全體としては9間を7間に改めたもので、残存している柱根が、柱行外方の柱ほど掘りかたの中

つたらしい。それは身命にあたる柱行5間分の柱間を3m等間にひろげ、周間に3m等間の廊を廻して柱行全體としては9間を7間に改めたもので、残存している柱根が、柱行外方の柱ほど掘りかたの中

の一致をわざわざ乱している点は不審といわねばならない。なお北の建物の西南隅の掘立柱掘りかたに重なつて、それ以前に掘られた柱2m、深さ約3mの掘穴を発見した。内部に何の施設も残さないが、おそらく井戸として掘られたものが、のちに建築にあたつて埋められたと推定される。

発見遺構は以上のようにあるが、こゝで想い起すのは昭和29年1月の一斎道路下遺跡の発掘で、その際東西にびる2階層の掘立柱の廻と、それにおくれた時期に造営された礫灰岩礫石を用いた廻の発見である。これらの遺構については当時いざれも複雑の如きものと推定され、宮城のかなり北方の地区にまで、大規模な建物が立ち並んだことを示した点で、大きな成果を収めたのであるが、一部の発掘だけでは廻の区割を知るに至らなかつた。ところが今回の発掘結果から見ると、礫灰岩を用いた第3番目の遺構は中央に小礫石があり、今回発掘された薬師廻と全く同様の規模をもつており、一連の廻と考えられる。さらにこれを大正13年に大施殿西北方約180mで発見された類似の小礫石列や、大施殿北方約60mの地点の礫灰岩切石で構築した構と結びつけると、東西約15m、南北約15mほどの区域を薬師廻が囲つたものと想定される。このような薬師廻をめぐらす一郭としては平安宮の内裏の内郭が知られており、その規模もこゝに想定されるものとはく類似しているから、この薬師廻のめぐらる一郭を平城宮の内裏には定位することが出来るのである。そうすると平安宮内裏が朝堂院東北方に位置しているのに対し、平城宮では、朝堂院の正北方にすぐ接して内裏が位置することになるわけである。



第4回 第4次発掘地域全景

今回の調査地域は、わざか「アール」であつたが、提起された問題にははなだ大きく、内裏の一隅を想定するに至つた。従来内裏と考えられていたのは今回想定した地域の西側で、朱雀大路の正面、宮城の丁度中央にあるが、その地域の発掘調査は行われておらず、遺物をきめ難い。従つて現在の我々の想定も「小范围の知見」にもとづくのであるから、決定的なことは今後に待たねばならない。しかし、平城宮全体としても重要な内裏の位置を解明するためには、この周辺の今後の調査がより一層期待されるわけである。なお、発掘調査事務所は、遺物保存のために、細殿にあたる附近の櫛立柱列をさけて建設した。

(工藤生幸)

第4・5次調査

調査地域は、通称一筋通りの北側で、第2次調査地域の東側をしめ、平城宮全城かみみると、平城宮中軸線の正北方の地域にあたり、前述したように、こゝはまた從来内裏と考えられた地域のすぐ北に位置する。調査面積は30アールに達し、礎盤風に石を用いた1棟を除いて、すべて櫛立柱からなる建物遺構を25棟、2条の溝、石敷、その他焼粋物處理のための土槽などを発見した。これらの遺構は、最低3回にわたる整地作業を示す土層のいずれからも検出され、各々の土層においても上部に重複しあつて、その層位や櫛立柱櫛りかたの重なりなどを検討した結果、これらの遺構の造営を8期に分つことが出来た。

I期 調査地域の中央より北より、東西に走る幅約1mの浅い溝

141のある時期である。溝底の流砂はわずかに認められる程度で、溝としての存続期間は永くなかったであろう。これまでの調査地域内では、この時期に造営された建築遺構は検出していない。

Ⅱ期～Ⅳ期の溝を埋め立てるとともに、第5次調査地域の東半に厚さ5cm程度の土盛りが行われる。ここに造営された建物は2棟あり、176は9間×2間（柱間各約3m）の身舎に、柱間約3mの廊が東西両側についた南北棟の建物で、南妻は調査地域外にのびている。その他、約5mをへだてて並行する南北方向2列の細状の性列[51]（柱間各約3m）¹⁾。この期のものかもしれない。

Ⅲ期～調査地域の北よりを東西に走る溝[5]がある。この溝はⅢ期の176建物廢絶後、Ⅳ期の土盛り以前に掘られたものでⅣ期まで存し

て

Ⅳ期～

れの遺構をよくつて全域にわたる厚さ10cm程度の土盛りがなされその上面に造営の行われた時期である。調査地域の南端

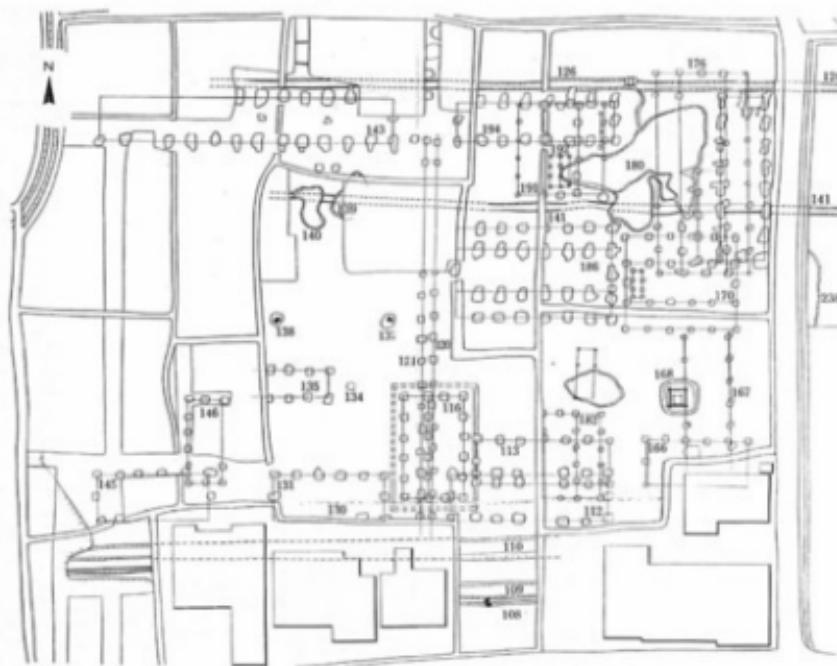
に近く草大の礫を敷き並べた溝状の石敷



が東西に走っているが、これは第2次調査のA群の石敷の東へ



第5回 第5次発掘地域全景



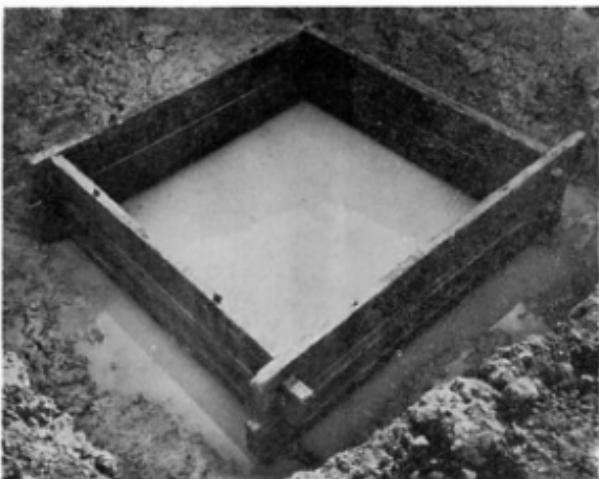
第6図 第2・4・5次発掘地域実測図

の延長にある(面積1300余坪)。建物遺構としては、2間(柱間各約2m)×5間(柱間各約3m)の身舎に、柱間約3.5mの廊が南北につく東西棟の建物170と、第5次調査地域で検出したが、その主要部分が東方の調査地域外に延びる2棟がある。213は南北2間(柱間各約3m)で、東西に長い建物、220は柱間3mの南北部分のみを検出したことになるが、現状では更通りを確定し得ないの

で、棟の方角はきまらない。

第5次調査地域では、ほかに整地面上にいくつかの不規則な形をした土壙がうがたれている。中央附近に位置する土壙219は東西約4m南北約6m深さ約5mで、土器片、木片、自然遺物などを含んだ厚さ約4mの堆積層

V期 第4次調査地域で4棟、第5次調査地域で4棟、計8棟遺落された時層である。まず194-195-112の3棟は妻を編えて並行する東西に長い建物で、その北東にあら171は南北に長い。すべて柱間約3m、梁間2間桁行7間の身舎をもつ。155はその南北両側に、172はその西側の南より4間分に廊がつく。第5次調査地域の4棟209-206-213-201では東西2間南北7間(柱間各約3m)の239建物のほか、その大部分が調査地域外に延びていて、詳細はわからない。この時期の建物は、一部ほど同規模で改築されている。この改築に伴つて、177の西



第7図 井戸

廻、三
の南
廻はと
りはら
われ、
II2は
約5m
北へす
らし、
住間2.8
mの南
北2到
東西6
間の建
物113
ととり
かえら
れてい
る。他
の4種はこの改築後も、そのまゝ存続して、いたようである。

このほかに177・194・195の3棟の建物にかこまれた地域に大きな土壇180がうがたれて、いる。特に177の西廻がこの土壤のため西側にのびていないところなどある。あるいは池ではなかつたかも思われる。

南よりで発見した井戸1番は、深さ約2m・邊約3mの方形に近い平
面の掘りかたのなかに、長さ約6m・幅約30cm・厚さ約9cmの材を内
法約1mのせいろ型に組み、この木枠を重ねて直邊橋で、とめ井戸枠と
したもので下段3段分が残つて、いた。この材にはそれが「従底南」

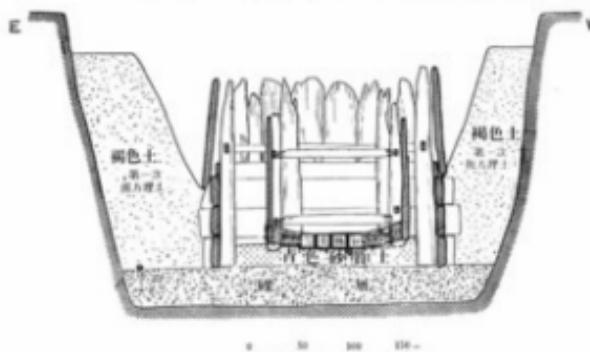
「此」、「北」、…

「車」……、「西

」等の番付が墨書き
されて、いる。地表面
との関係で当初は10
段ほどあつたものと
推定される。このV
期は第2次調査のB
・C群に対比するも
ので、第5次発掘調
査報告のV・D群と
したものが、ある。

V期 V期の建物
の廻後、3棟の建
物が造営されてい
る。211は5間×2
間(住間各約2.4m)

身合に3mの北廻と
身合に3mの北廻と



第8図 井戸断面図



第9回 丹波の番付

地域の建物群の間を仕切る道路のような役割をはたし、来たのでないかと考えられる。この地域にⅣ期になつて初めて建物の遺跡が行わると共に、礎が作られたこととは無関係であるまい。

なお第4次調査地域西南部分から第2次調査地域南半にかけて、3度盛土がなされている。この盛土の上に直接造営されたものは今回の調査地内では認められなかつた。先に述べた棚列及び建物との盛土との時間的な関係は明らかでないが、盛土以後も存続したことは確かである。第2次調査のE・F・G群がこの時期のものである。

3日目の南端のつく東西棟の建物であるが、他のすべて獨立柱であるのに対し、厚さ50cm程度の掘りかた内に、約40cm角の上面の平らな不整形の石を、礎盤風にすえている点が注意をひく。191は5間×2間（柱間各2.4m）の身舎の東西に、3日の廟のつく南北棟の建物であり、182は5間×2間（柱間各約2m）の身舎の東に、約3.6mの廟のつく南北棟のものである。第2次調査のD群はこの廟のものである。

初期～Ⅲ期の建物と棚列のうえに土器を多量に含んだ堆積層のある浅い場を検出した。これと同時期とみなし得る遺構はない。たゞⅣ期の井戸168はこの場まで使用されており、初期をあまりへだたらぬころに仮組の4段以上をとりはらい、4本の阴柱と2段以上の胴貫からなる様の外に側板を立てならべた。内法約1m程度のものに改造している。なお、この井戸の枠材には、一部に辰押、楳など建物の古材が転用されている。

これらの遺構とともに見つた遺物には、木製、木瓦、漆製品、土器、瓦類、自然石類などがある。

その西に4間（柱間各約3.6m）×2間（柱間各約2.4m）の南北棟の建物236があり、5間（柱間各約2m）×2間（柱間各約3m）の東西棟の建物166もおそらく同期のものであろう。

それらの獨立柱列から西約15mの範囲は、初期まで一連の建物も遺跡されていない。しかしこの範囲が朱雀門の正北方にあたつていることを考慮あわせると、この部分が第4次調査地域の建物群と第5次調査

がけしたものと、下端を尖らせたものと2種がある。これは貢送または保管にさいしての包装方法の違いによるものと考えられる。(C) 前の2種とは異つて、圓形が不明で、落書きの内容のものや万葉仮名で記したものなどが見られる。このほかに、木筒の削り屑が相当散みられ、紀年跡のあるものもある。この削り屑の存在や、その他遺物の保存状況からみると、この木筒を出土した土壤は、比較的短期間に用いられた当時の「みすて場」であったと考えられる。

土器類は、施釉陶器、須恵器、土師器の3種であるが、土師器が最も多量で、施釉陶器が隠匿であること、器形も杯、碗、皿の類の供應形態のものが多いことなどは、これまでと同様である。これらの土器類は、木筒に伴出した一群や、墳期の遣構の土器のように、使用年代に一つの規準を与えると共に、8世紀後半から9世紀にかけての編年的研究を、一步前進せしめる基本資料となるものである。

なお土師器に墨書のあるものが数点検出された。そのうちには写經字風の達筆で「弁施勿他人取」と、「弁施勿他人取」とかい杯形土器があつて、土器の用法を示唆する興味あるものがある。

木器には箸、匙、曲物の底板などがあり、その他漆塗りの團扇状製品、猿皮、木炭、それくるみや藤の実のヤサなどの自然遺物が出土している。



第104図 黒漆 土師器

一、第3次調査で検出した埴輪部は、昭和29年度の調査で検出した埴輪と一連のもので、この埴輪部の一郭は内裏と推定される。しかし、昭和29年度に検出した埴輪のうちでは、この埴輪部が最もよくこれまで通じられたものであるから、この一部を内裏としても、それは和銅造営当初のものではなく、むしろそれよりおくれたものと考えられる。とはいっても、今回の調査地内では、昭和29年度のような埴輪の重複が認められないか

ら、この地区的埴輪部に先行する時期の性格については、将来に大きな問題を残している。

二、第4・5次調査の結果、両調査地域の中央にある道路または柵によつて、遣構が東西2群に分れていたと考えられる。東群の地域は



第111図 軒瓦 1組

一部しか調査していないが、木簡の出土により、このあたりに宮内省の食料をつかさどる大膳院や、大炊寮にかゝりある建物があつたと推定され、プロフタ甲板にまとまつた官庁の建物群という点では、平安宮古園とも符合し、内装の位置の問題ともかゝわりをもつ。

平城宮跡発掘調査を総観

三、さうに西群の建物をみると、東よりすなわち平城宮の中軸線上にのつた道路をいはど、身舎の両側に廻をつけたものが多く、西にいくにつれて片廻の建物から、さらに身舎だけの簡単なものになる傾向があつて、平面構成の上から一層の建物が、用途によつて使い分けられていたことを考えさせる。また、このような建物群と、第3次調査地域の内裏の建物とを比較すると、内裏建物では、入母屋造りの床張の建物が、その前面の細唐風の建物とセットになつて建てられていて、官衙の建物群よりは一段とすぐれたものであつたことが推定される。こゝにもまた両地域の建物群の性格の違いを考えさせるものがある。

第四に上げられることは、木簡の免見である。この木簡は、それに伴つた車轍や遺物の実年代の一点を示して、諸跡の層序分類に決定的な役割を果す点でも重要なことは勿論であるが、それにもまして、これまで知ることの出来なかつた平城宮の宫廷生活の一端を示す資料として、高く評価せねばならない。

調査の結果明らかになつた車轍と遺物には、なお多くの問題を含んで、これから研究に待つところが多いが、それについてもその性格と年代に一応の目途を得たことは、今後の調査にとつて大きな成果といふべきであろう。

なお第5次調査中に、本調査者手、以来、常に陣頭で指揮をとられた所長藤田嘉樂先生が、にわかに不帰の客となられた。今後先生の志を体して調査に精進することを期したい。

(坪井清足・田中 球)

頭塔の実測調査を了えて

建造物研究室・遺跡庭園

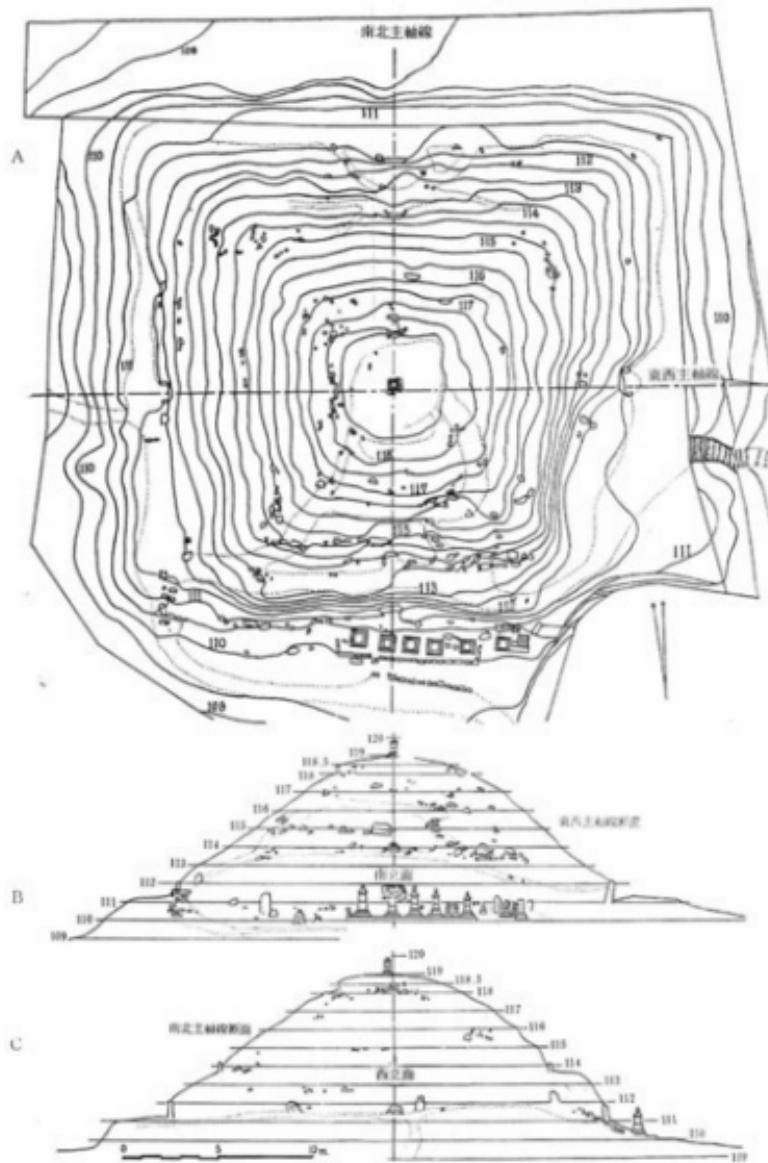
一、調査の経緯

奈良市高畠町（戒石）にある史跡頭塔については、既に多くの研究、特にその復原的研究が公表されているが、その研究の根本をなすと思われる実測方法と、出来上った実測図は必ずしも満足とは言えなかつたようである。その原因は何分にも地形が急峻で、テープを水平に引くことが困難であったから、従来通りのテープ使用の平假調査が不向きであつたこと、レベルやトランシットを使用する場合、その位置を頻繁に移動せねばならぬことなどの悪条件が重なり合つて、それが重要な原因かと思われる。頭塔の保存や今後の研究のためにも精密な実測図を作つて置くことが必要であると各方面の強い要望もあつたし、この調査には、私自身異常な興味を感じていたので、昭和35年10月はじめから、11月下旬にかけて、ひたすらその測量に従事した。その区域は東西38m、南北43m。それに東南隅に於ける落水道に開かれた南門からの登り口と、並用起西裏側からの通路附近を含めて合計面積190m²の全区域を測量した。縮尺を1:50、石仏、石塔、石碑は勿論のこと、以上の樹木等の20cm程度の砂岩、石隣段、転石、日通10cm。

塔がこの頭塔に相当するものらしいこと、東大寺寺境内に見える「新薬師寺」西野の塔又は「石塔」がそれに相当するものらしいとの従来の推定の是非を検討するために、頭塔の中心部（墳丘状地形のほぼ中央部118.90に建つ五輪塔の頭部）から、トランシットを使用して、新薬師寺（現在本堂）東大寺（現在の大仏殿元興寺（現在薬師院本堂）の方角角を測定した。それと同時に従来行つて来た東大寺旧境内や、興福寺旧境内を含む奈良公園主要部分の実測値（方位角及び実長）とを照合して東大寺大仏殿及西塔の中心部との直線距離、興福寺五重塔との候補的相互関係などを算出して見た。またこの頭塔を発達する跡、在来地形に如何ほどまで順応し得たかを知るために、頭塔附近から池、瑜伽山台地一番にかけての地形実測図（縮尺五百分の一）を作製することによつて、この頭塔の基盤がどのようになつていていたかを知り、盛土切取など工事中に移動された土量の算出をも試みたのである。

次に東大寺別当次第（詳書類原本）による「御寺の朱術の末」の土石標、石隣段、露出している敷石、転石などの配置状態を、東西南北四方向からの立面図（第1図B・C）に記入した。

次に東大寺別当次第（詳書類原本）による「御寺の朱術の末」の土石標がこの頭塔に相当するものらしいこと、東大寺寺境内に見える「新薬師寺」西野の塔又は「石塔」がそれに相当するものらしいとの従来の推定の是非を検討するために、頭塔の中心部（墳丘状地形のほぼ中央部118.90に建つ五輪塔の頭部）から、トランシットを使用して、新薬師寺（現在本堂）東大寺（現在の大仏殿元興寺（現在薬師院本堂）の方角角を測定した。それと同時に従来行つて来た東大寺旧境内や、興福寺旧境内を含む奈良公園主要部分の実測値（方位角及び実長）とを照合して東大寺大仏殿及西塔の中心部との直線距離、興福寺五重塔との候補的相互関係などを算出して見た。またこの頭塔を発達する跡、在来地形に如何ほどまで順応し得たかを知るために、頭塔附近から池、瑜伽山台地一番にかけての地形実測図（縮尺五百分の一）を作製することによつて、この頭塔の基盤がどのようになつていていたかを知り、盛土切取など工事中に移動された土量の算出をも試みたのである。



第1図 上段(A)頭塔平面図 中段(B)頭塔南立面図 下段(C)頭塔西立面図

二、石仏などの方位的配置



第2図 頸塔南北主軸線上より東大寺大仏殿を望む

石仏の配列状態を示す場合、もしそれらが秩序よく配置されるためには、南北及び東西方向の主軸線の交点に於て主軸線と一定の角度をもつて交る副軸線があるかどうか、若しもあるなら、その角度はどうであるか、ということを確かめる必要がある。頸塔の頂上で、しかもほぼ中心と思われる位置に建つ五輪塔が後世の設置と考えられるので、これを単純に中心点と定めてから、まずその北側斜面最上段、三段目、下段の中央に並ぶ三つの石仏と、南側斜

面の三段目及下段中央と

に配列される石仏群の中を結んで直線（南北線）を引いて見た。するとそれは一応五輪塔の中心を横切るので、これを南北主軸線であろうと推定した。そこでこの直線上にトランシットを据えて、その方位角を測って見たところ、それは磁北から 9 度 50 分 40 秒だけ東（時計方向）にふれていることがわかるが、しかもそ

の即達線の視野の真中に大仏殿の大棟中点が望まれるから、頸塔の南北主軸線は東大寺（殊に大仏殿）を意識して設定されたものであることを確認することができた（第2図）。

次に東西の主軸線であるが、東側斜面の最上段、二段目、三段目に石仏は一つもなく、その下段中央に唯一個残っているにすぎない。

そこで西側斜面に於ける最上段と、下段中央にある二つの石仏を中心を結んだ直線を作つて見ると、幸なことに東側面下段中央の石仏がその直線上に含まれるので、これも一直線上にあるものと見てよいであろう。

ところでこの直線の方位角であるが、一見五輪塔の中心通り、南北主軸線と直交するかのように思われる。けれども実は五輪塔の中心から 25 cm だけ南に寄つた位置で交叉し、南北主軸線とは西から見て 88 度 30 分だけ傾く、即ち直角と一度 30 分ふれている勘定になる。

次に両主軸線以外のものについて観察して見るとそれらの配列も決して無秩序ではない。即ち崩壊又はせり出した土壌の影響によつて明かに位置変更されたと見られる前面三段目東寄のもの、同じく下段西側前方寄りのもの、西側下段南寄のものの三個は、どれも少しく旧位置を勤めていると思われるが、それ以外のもの、即ち、南側二段目東西のもの、西側下段北寄のものなどは、どれも主軸線と、22 度半（四分の一直角）だけ離れた直線上に来る。この直線を私は副軸線と名づける。先に触れておいたように、やや移動していると思われる三個の石仏も、これと対応する副軸線上から少しづらかへ移動したにす

三、石仏などの垂直的配置

次に垂直的配列状態を見て行こう。東側111.07mと南側(110.97m)の最下段の石仏のスルが海抜11mを削除して、ほぼ揃うと認むよ。が、あとは最上段も、二段目、三段目も何れも不揃いである。例えは北側に於ては、下段111.25m・三段目113.5m(1段目缺)・最上段118.0mである。西側は主軸線上に於て下段111.4m・三段目と二段目缺・最上段117.85mである。南側は下段111.00m・三段目113.2m¹・1段目(中央缺)・東側で代用)116.0m・最上段缺・東側は下段111.2mである。又同じ段について測定して見る。南側のが一番に高さが不揃いで、第三段目の東側のは113.50mである。下段の主軸線上よりやや西側前方にあるのは、中央の石仏よりは更に1.20mも低い109.8m以下にある。という状態である。又西側のは二段目三段目を缺くが、その下段の南寄りは111.55m、北寄りは111.45mである。したがって各段は同一平面にはなく、土崩れのため大きくなっているらしい二個の石仏は例外として、各斜面に於ける石仏の配列にはほぼ一定の秩序があるようにならざる。即ち、東側は下段中央の石仏一個しか存在しないので不規則としても、其他の南北西の各斜面の各段は、その上下の間隔が25m(約7尺4寸)毎に段を設けて通路とし、そこに山頭のように配列されていたようである。

四、石塔、石碑及び出土石柱残缺など

石塔では最も古いものでも鎌倉時代元久3年(1206)の緒文のあ

石塔の実測調査を行つた。

るものぐらいで、南側下段中央石仏南前面の五輪塔がそれである。² また頭塔頂上のものでもそれよりは古いものではなく、おそらく江戸時代初期くらいのものであろう。従つて石塔の類はほとんど中世以後の創造にかかるものようである。ところが並田清溪氏所蔵にかかる石造物がこの土地東側入口即ち(東ト段階邊)から掘り出されたものと伝えられるもので、この石造物について判明したことを記そう。

この石造物の質は一種の凝灰岩で透香石と呼ばれるものに類似している。現在は破損して二個になつてゐるが、その一つ(仮にaとする)の高さは23.5cm、もう一つ(仮にbとする)は高さ25cmある。aの断面は長径(対角線)20cm、短径18cmなどの部分をつて見てもやや偏平の六角形である。bの断面は長径17cm但しそのうちの一面前だけは正しく角度をなす。その二面の底辺であるさしわたし15cmの外側の断面は、半径12cmの円弧をなしている。またこの純じ曲面には凹凸があり、人面の如きものが見えるが確かでない。このようにaの上下部を、bの下半部の断面、即ち内角が同一角度ではないが、aを下。bを上にして重ね合わせるとうまく工合に乗せることができる。その合計した高さが45cmとなるので、明らかに元は一つであつた石柱の一部が折れたのではないかと考えられる。さてこの石柱が何であるか。一見上の上端には二段のくびれがあり、上方部に行くにつれてすぼまつて行くことから、石造の古塔の相輪ではないかと見ると、発見されたその位置から言つて、塔をかこむ想の一部に設けられた石の門柱の先端部ではなかと言ふ人もいる。純じ曲面は光潔の當て方によつては、かなりはつきりと凸凹が見られるが、それが果して何なのか今のところ全く見

当がつかない。

次に土塔の外側にある石仏であるが、そのうちで比較的著名なのは、南側清水町通に開かれた南門を入って、すぐ右手、右階段の登り口脇の小祠内にある弥陀と地藏の立像を半円形で並列した細面形の双仏石である。像の周囲を方形に彫り凹め、様邊に彫詰があるが、その造頭年代ははつきりしない。

五、敷 石

奈良の清水通から南門前にある石階段や、並用巷からほる通路にある石階段などは、明らかに後世の建造に成るものであろうが、頭塔の四周にめぐらされた平坦な部分に露出している磐石は当初のものと関係がありそうに思われる。塔を形成している四面の傾斜地のうち、その東南隅、西南隅と、そして東北隅の一部分に、土砂の崩壊した部分が見出されるが、その他の昔とあまりひどく変化していないと思われる。地表又は地表から極めて浅い處に見出される砾石類、殊に少しく平らになつていて通路に当られていたらしい部分（彼はこの通路の部分が缺落したと思われる）の転石類や、通路の表面でも雨水によつて発発にげずられたと推定される勾配のついている部分では、敷石が多く現われていることは曾てその平坦面が削せまい敷石道であったことを示すようである。

六、兩都諸大寺堂塔との関係

東大寺での他南都諸大寺堂塔と頭塔頂点の相互関係を知るべく、南

北主軸線上にトランシットをすつけて測量した結果、東大寺大仏殿の中心は磁北より9度50分40秒東に当ることは前述の通りである。當時の平城京の配直から見て、その真北は約6度傾いていたことが判る。伝え聞くように頭塔は大仏殿の真南ではないことが判るが、先にも触れたように、大仏殿の方向である9度50分40秒は石仏の南北主軸線と完全に一致するので、東大寺別當次第に載せる「御寺朱雀東」とあるのは、正しく真南に持つて行つたのではなくて、東大寺大仏殿の方角を充分に意識して、石仏の配列も、その位置をも決定したことを確認することができる。

しかし一方東大寺西塔（南大門中心と大仏殿中心とを結ぶ東大寺主軸線より、西方81mにある）を考慮に入れると、大仏殿と頭塔の距離（1315m）から、大仏殿と南大門を結んだ主軸線と東西兩塔を結んだ直線との距離（50m）を差引いた長さ1266mにsin 4度（実は3度50分40秒）をかけると約80mという距離を得るのである。また一昨年夏來行つて来た東大寺回境内測量図や、昨夏以来行つた奈良公園（春日神社や興福寺境内を含む）の実測図と、同じ縮尺で作製しつつあつた頭塔附近実測図とを統合してその相互位置関係を調査したところ、東大寺西塔は、正しく頭塔から引いた磁北線上に来ることが判つた。即ち計算上からも、測面上からも頭塔と東大寺西塔とは正しく磁北線上に並んでいることが判つたのである。

次に興福寺五重塔は、頭塔からは直接に望見出来ないのであるが、奈良公園実測図上で結んでみると、それは磁北線から西へ40度傾き、距離は約750mある。然もこの直線は、東大寺大仏殿の中心と興福寺

五重塔の中心とを結んだ直線と正しく直交する関係にあるのも面白い。次に頭塔頂点から測定した新薬師寺との関係を示そう。現在の本堂の中心は、羅北から $109^{\circ}30'$ ($108^{\circ}52'26''$)である。記録の示すように東大寺の南側で、新薬師寺の「西の野」に相当するその位置から考へても、両寺のことを充分に意識して、計測された土塔であることが判然とするし。この頭塔は、東大寺と新薬師寺に関係をもつ人、即ち実忠和尚の創意に因るものと考えて間違なさうである。現在新薬師寺本堂は建築としては天平時代の遺構であるが、当時の金堂や講堂ではなく、おそらく是食堂或は政所室ではないかと考えられるのである。またそうすれば新薬師寺の中心部である金堂や塔は、他の位置(おそらく現在本堂の西方)にあつたことを知る。私達が今回作製した奈良公園測量図と、正倉院御物天平飾室八咫鏡東大寺四天王間に現われた新薬師寺金堂の位置とを対照して推定すると昔の金堂の中心は、現在の本堂の西方 $160m$ にあつたことになる。この位置には大きな疑問があるが、東大寺四天王間の比例に狂いがないとすると、その金堂の中心は頭塔の頂点から 114° ($108^{\circ}52'26''$)として $123m$ と算出される。

七、頭塔築造法と春日野の地形

新薬師寺の方から旧大糸院池の北側に昇る鬼蘭山及び西方院山

(奈良ホテル及び瑜伽神社の建つ尾根)に向つて伸びている台地(瑜伽山台地と呼ぶ)は、新薬師寺附近から中高畠町附近にかけては幅が割合に広い。ところが破石附近では、法務局と稻良県土木出張所の西背面の方から、天神社の南下方にかけて浅い渓谷地形があり、この

頭塔の実測調査を(?)。

谷間をさしはさんで、台地の先端が二つに分かれている。松林院跡の南側である山上町の尾根を主脈とすれば、面塔の建つ清水通寄りの方は支脈ということになる。主脈の方は更に西に延び、元の菅原川水系(現在の鶴油・糞池)と清水谷とが次第にせまつて象御神社附近では幅約 $20m$ の複尾根となつて城跡から西方院山、旧大糸院境内の鬼蘭山へとつながる。支脈の方は頭塔の西南邊に於ては清水通に臨んで急崖となり、山神社南あたりで清水谷に沈んでいる。

このような鬼蘭山台地の地形を描いた地図の上に書き込まれた頭塔の地形は、ちょうど鈴鉢形台地上にビラミッドを築いたような状態であると見ることができよう。

今回実測調査に利用した頭塔附近の高抜高は、法務局前にある水準点 $109.56m$ の右標から引いたものであつて、米川溝溝の西側に於て $108.20m$ 、頭塔の西北隅に於ては $108.50m$ を示している。これは頭塔築造の際に利用された基盤であろう。その基盤は海抜平均 $109m$ の台地であり、中心附近に於て高さ約 $10m$ 、底辺約 $40m$ 、勾配は約 35° の方錐として築いたものであることが知られる。従つて算出される土量は大略 $2050m^3$ であると思われる。

八、結　び

以上実測の結果判明したことは頭塔は比較的よく遺存しており、高さ海抜約 $109m$ の基盤(地山)の上に約 $10m$ の盛土をして造つた方錐体で、四方に 35° を以て傾いた斜面を玉石で葺い、主軸線上に最上段、三段目、下段各一層、副軸線上には、一段目、三段目下段各一層つ、

し。

大小36個の石仏を配置したものらしい。また頭塔は、その石仏の配列

状況から見て、確かに東大寺森に大仏殿を意識して建築されたもので、その角度は南北から東に9度50分40秒ふれており、その実測距離は1316mであることが知られる。最初は新薬師寺旧金堂の真西をと心掛けた計画したものであらうが、現在でもよくある実例通り、その施工に

当つて地形の制約から、東大寺大仏殿の真南からはやや(約4度だけ)西に寄せながらも、石仏の配列の南北主軸だけは大仏殿の方位角に完全に一致させている。一方、新薬師寺金堂の真西から約十数度(13~18度)北に寄せてその中心位置が決定されたものであらう。しかしこれだけの移動は古い記録に示される「新薬師寺西野」を完全に覆すものでないから、実忠和尚の計画と解釈することに矛盾は感じられないようである。従つてその築造年代は神護景雲元年と見て差支えないものと思われる。

註

- (1) 東大寺別當次第、「神護景雲元年東山和尚依・僧正命・御寺朱術之采也」。
土塔」とある。
- (2) 東大寺書院所取、「天宗廿九条事」に「一奉一造立塔」基在「新薬師寺西野」以「去坐北元年 所造通也」とある。
- (3) この土塔の中心は現在五輪塔の邊で隠蔽より、南へ25m移動した地点であり、従つて近世五輪塔がその中心部に建たず、湖つて25m北に寄つて走らせてあると見てよからう。
- (4) 数年前中村春寿君の調査した際にこの附近から東大寺本堂と考えられる古瓦が発見された由である。おそらく瓦礫の上に、瓦葺の廻をかけたものら

故西村直若「南都石仏巡礼」による。興福寺五重塔上からの「ラクライム」によると、この数据が再確認され推定される。

(5) 正倉院物天平勝宝八歳東大寺四重塔ではその散地の内外に百引方形の輪郭を描いている。その輪郭を実測図にあてはめると、東大寺大仏殿、法華堂、軒門、中門、西大門周辺では、すべて横(東西幅)213m、縦(南北幅)125mの比率に割りつけられていることが判つた。このような数值と比率を基礎として、天平勝宝八歳塔に展開せを作り、天平勝宝八歳塔に示された新薬師寺の位置を、実測図にあてはめて見た。ただこのようにして推定した新薬師寺金堂(中心)は、現存本堂(中心)の西25m隔つており、やや寄せざるの点やや齊度を失い、天平勝宝塔中一丘だけ跡つて西に寄せるのではないかとも考えられる。もしそうであるとするなら塔頂点より新薬師寺金堂は南西にして10度30分、距離にして255m(原作塔頂点より新薬師寺金堂は南西にして10度30分、距離にして255m(原作

(未 終)

唐招提寺総合調査概要

昭和35年7月11日より7月末にかけて、当研究所全部署の参加のもとに、唐招提寺の総合調査を行った。これは昭和29年の総合調査の续続で、前回調査しえなかつた部分に重点をおいた。美術工芸、建造物両研究室は寺地と空堀、歴史研究室は瓦瓦と古文書の調査に当つた。

建造物研究室庭園遺跡室は、寺地の実測調査を行い、縮尺二百分一および五百分の一の地形圖を作製した。

全堂内外に大がかりな足場を構築し、建築家はこれを利用して金堂の斗拱・小屋組その他の建築部材の詳細な調査により、建物の変遷を知り、創始期の姿を復原すべく貴重の蒐集につとめた。美術工芸研究室工芸室は足場を利用して金堂内部の支輪機、虹梁、天井などに残る文様や色彩について調査した。また即座室は本尊、千手觀音、藥師その他の仏像の形態について、レヘルその他の測量機械を使用して、詳細な実測調査を行つた。

歴史研究室は同寺に保存されている軒丸瓦、軒平瓦、雁脛瓦、鬼瓦等の形狀、文様、刻銘等を調査した。古文書室は数多くの古文書中

第1図 唐招提寺の実測地形圖

から大般若經、版經、講式、古文書、雜書、參文等を整理、調査した。

以下は今回の調査の略報であるが、なお未完の部分があり、今後も引き続き調査を行う必要がある。詳細については調査の完了をまつて報告を作製する予定である。

一 寺地の測量

既に着手している南部諸大寺旧寺地調査の一環として、建造物研究室庭園道路班は昨年七月から年末にかけて、その旧寺地の実測調査を継続した。調査の区域は、南大門前を東西に通つている道路の北側、西は近鉄線路(中心巻)の西側約30mを南北に通つて走る道路(中心巻)を限界とし、東は秋葉川の西岸までとした。此限は唐招提寺東門の北方約90mの地点から、西方より遠下する溝渠に添つて、天神社との間から更に西に向い、本坊臥松院背後突出部(竹籠)を含み、その西につづく畠地を含めた面積約12ヘクタールの区域である。作製した図面は縮尺五百分の一、測点(150点)毎に海拔標高を記し、50cm毎の等高線を切つた。また国宝或は重要文化財に指定されている建物はその性の位置を示し、他の建物は繪図だけを示すに止めた。

調査の結果判明した主なる事項は、地勢は西北に高く、南東に向つて傾き、台地の先端を巧妙に利用したものであることで、東北邊は元湧流の河床であったのを、旧臥松院背後に於て土塁をもつて堰き止め、その渓流を直角に東に導いている。即ち開山灘の西南東の三辺をかこむ箇所はその河床地形を利用したものである。

現在の東塔跡を観察すると、その基壇は明らかに盛土であるらしいが、

それとは対照的位置にある西塔跡(「若しあつたと仮定すると」)の地形は台地の先端をそのまま利用したものと考えられる。

成城は^(成城)近鉄(「成城」)の南隣にあつた旧妙音院の更に南側の部分に於て、この西塔の位置を含む台地の一部を更に広め約1,000m²、最西側に於て深さ5m以上を掘り込み、平堤地を造成し、広さ27m²、高さ1mの石造壇がその中央部に設置されている。

唐招提院(木坊)の北背後の山麓から湧出する清水をもつて現在の圓池が形成されているが、そこから東南方にあたつて曾て二つの小園池が連なつていて、水脈であることを示していた。更に追求して行くと、その延長上に東室東側の古井戸、坂倉背後の兼善池及び電王社側の老池が並んでいることがわかる。

唐招提寺旧寺地調査は更に引きつき難められる予定であるが。今後の調査に残された問題は、古圖との対比によつて既に失われた簡坊の区域や建物の位置を一層はつきりとさせること、旧寺地と京城京奈坊跡との關係、更には古記載の示す新田郡親王別業や藤原仲麻呂や藤原清河の宅地との關係などを推知する手がかりをつかみたいものであ

註

- (1) 唐招提寺園庭古図7枚のうち西塔の要(おそらく想像であろう)を抜くもの2枚、方形の袖廊を書きその中に「西塔」と書くものの1枚、袖廊内に「西塔跡」と書くものの2枚、繪図のみのもの1枚、全無縫合ないものの1枚がある。実現の有無は疑問としても、立塔の計画と、地形の造成だけはあ

つものと見たい。

例、現在北川氏の住居を比叡坊と呼んでいるが、ここは大國によれば妙音院となつており、頂妙音院境内に東方から比叡坊の建物を移して来たのによるものらしい。この南の空地（約畠）は田妙音院と推定される。

問、昭和31年に唐招提寺本坊周辺の整理整頓を行った際、園池の泥土を削掘したが、池底から優良な湯泉を見出すことができた。また現在の本坊客殿の裏側（新設蔵庫の北側）には、当時の園池に90平方㍍位の小さな池があつたが、その時の造園工事で埋立てた。
(新、舊)

二　金　堂

A　建　築

この建物については、かつて1936年に浅野清が創建時の姿を復原的に考察しており（『唐招提寺金堂復原考』）、現状調査としてはその際ほぼ尽されているので、今回の調査は建物各部の実測及び写真撮影を主眼とし、あわせて先の復原考察に検討を加えることを目的とした。調査によつて明らかにされた事項の概略を建物各部毎について記せば以下の如くである。

1 紬部及び斗拱 身書がごく一部に明治修理時の取替材を含むのみで、創建時の旧状をよく伝えているのに反し、側廻りの斗拱には後補の仕事が多い。その大部分は江戸時代元禄年間の修理材であるが、北側の尾棟上には、一見創建材と見らすそれよりやや風韻の少い材があり、これはおそらく文永7年修理時の取替材と思われる。この文替材は数量も少く、使用場所も丸桁下の斗拱に限られているので、この時の修理は尾棟から上方のみと推定される。一方側柱上の大舟計

22ヶの中、創建材1、明治材7を除いた14ヶが元裸材であり、頭貫にもこの時の材が相当数あるから、元様には側廻りを解体した大修理が行われたことが判る。

これらの斗拱を精査して注意されたのは、元裸修理時に行われた外板を整える工作で、大別して次の2点があげられる。その第1は斗拱組の整備で、この時斗を一つ新たに置きだし、肘木の範縄等もそれに合わせて附したことである。すなわち一手先目の一番上にあつて尾樋を直接受けている外は、總計30ヶの中唯1ヶを除いてはいずれも元裸もしくは明治の取替材であり、吉村の1ヶも元來この位置の卷斗とは見られない。このことは創建当初にはこの位置の斗ではなく、元裸に附加されたことを思われる。この斗がのる肘木上面の範縄も当初は存在せず、元裸修理時に新たに附されたことが明らかに看取され、また尾樋にもこの斗による巻頭型は見られない。斗の下面が當つて、肘木の部分を見ることが出来れば、この斗が当初から存在したか否かを判定することは容易であるが、それが不可能な現状からでも、この位置の卷斗は元裸に附加されたと判断して誤らないであろう。

次に工作の第2は外觀の整備で、この時相当数の卷斗の斗拱、肘木の下駒等を削り直して形を整え、また一部墨跡のはなはだし、斗拱を内方のものと置き替えたりして外觀を新装の如く見せる工作をしてい。したがつて斗拱の曲線の性質には創建時と多少變つてしまつたものがあり、特に尾樋では後述するように地盤の勾配をゆるくしたために、それに見合つごとく尾樋先端の下面を削り、また上面にはハギ木をして反りを強く見せた。極細紀や軒反りの変更に伴う尾樋の変形は

第2回 金堂復原断面図

3m

4m

5m

6m

7m

8m

9m

10m

11m

12m

13m

14m

15m

16m

17m

18m

19m

20m

21m

22m

23m

24m

25m

26m

27m

28m

29m

30m

31m

32m

33m

34m

35m

36m

37m

38m

39m

40m

41m

42m

43m

44m

45m

46m

47m

48m

49m

50m

51m

52m

53m

54m

55m

56m

57m

58m

59m

60m

61m

62m

63m

64m

65m

66m

67m

68m

69m

70m

71m

72m

73m

74m

75m

76m

77m

78m

79m

80m

81m

82m

83m

84m

85m

86m

87m

88m

89m

90m

91m

92m

93m

94m

95m

96m

97m

98m

99m

100m

101m

102m

103m

104m

105m

106m

107m

108m

109m

110m

111m

112m

113m

114m

115m

116m

117m

118m

119m

120m

121m

122m

123m

124m

125m

126m

127m

128m

129m

130m

131m

132m

133m

134m

135m

136m

137m

138m

139m

140m

141m

142m

143m

144m

145m

146m

147m

148m

149m

150m

151m

152m

153m

154m

155m

156m

157m

158m

159m

160m

161m

162m

163m

164m

165m

166m

167m

168m

169m

170m

171m

172m

173m

174m

175m

176m

177m

178m

179m

180m

181m

182m

183m

184m

185m

186m

187m

188m

189m

190m

191m

192m

193m

194m

195m

196m

197m

198m

199m

200m

201m

202m

203m

204m

205m

206m

207m

208m

209m

210m

211m

212m

213m

214m

215m

216m

217m

218m

219m

220m

221m

222m

223m

224m

225m

226m

227m

228m

229m

230m

231m

232m

233m

234m

235m

236m

237m

238m

239m

240m

241m

242m

243m

244m

245m

246m

247m

248m

249m

250m

251m

252m

253m

254m

255m

256m

257m

258m

259m

260m

261m

262m

263m

264m

265m

266m

267m

268m

269m

270m

271m

272m

273m

274m

275m

276m

277m

278m

279m

280m

281m

282m

283m

284m

285m

286m

287m

288m

289m

290m

291m

292m

293m

294m

295m

296m

297m

298m

299m

300m

301m

302m

303m

304m

305m

306m

307m

308m

309m

310m

311m

312m

313m

314m

315m

316m

317m

318m

319m

320m

321m

322m

323m

くつかの復原資料を追加する発見はあつたが、古材の種類としてはさきの調査以上の新種を見出しえず、したがつて復原の大綱は全く變らない。ただ尾棟および地樋の勾配を前案より多少強めた方がよさそうで、復原の結果を示せば第2図の如くである。図によつて前案との相違を簡単に説明すると、まず小屋組材で残存する古材は入側通り尾樋、同上母屋、側通り母屋の3種あるが、これらの旧高さを抑える資料（小屋裏）は見出せない。したがつて尾樋の勾配は確定し得ず、先の復原では現状のままを用いて約5寸勾配とした。しかし明治修理前の実測値では尾樋勾配は5.5-8寸となつており、この差は辰年月の使用によつて折れ曲がった尾樋を再用するために、修理時に尾樋尻を出来るだけ下げる結果とみられるから、当初は少くとも5寸勾配はあつたと考えられる。次に地樋も同様に勾配が確定せず、前案では尾樋尻に直接横掛の母屋をのせるものとして復原したが、この母屋の下面には尾樋を挿んで立つ東の正殿があり、それが四角い東の全形を示すところをみると、尾樋と東との咬合つて上の母屋との間は多少間際があつたらしい。その間際を定める資料はないので、他の例を参考に適当な寸法によつて作図すれば、下方地樋の勾配は4寸程度となる。

大梁以上は小屋組には全く資料がなく、わざかに上方樋のうち樋木上の組手、もしくは下方樋との組手仕口が残る古材17本によつてその全長を推定し得るものがあり、上方樋の勾配が7寸位であったことがわかるだけである。しかし以上で屋根の骨組の大様はきまり、全体の引通し勾配が5寸程度におさまつて、奈良時代の屋根勾配としては恰好なものとなる。こうして樋勾配を前案より強めて、多少ゆるすぎる

感があつた尾樋には元禄修理時を除いても二回の種止釘穴があるから、中古に樋の打替がおこなわれたことが判るが、小屋材や樋等には中古の補足材と思われるものをほとんど見出しえなかつたので、このつと推定されるのである。

発見された母屋には元禄修理時を除いても二回の種止釘穴がある。創建当初の構造は、元禄修理時までよく保存されていたと思われる。なお野地板に元享三年の墨書きをもつたものがあり、同種の板が多量に存在するから、この時母屋の葺替をおこなつたことは明らかで、東方通尾に記す刻銘と合致する。

軒の復原につれてはさきの考察の範囲を出なかつたが、地樋、飛拂樋とともにその外側を元禄修理時に削り直されていることが判つた。現在見る地樋の下面の反りは、この時

で、当初はもう少しゆるかつたと思われる。這種の勾配が強まり（現
状約3寸）極にも現在程の反りはなかつたとする。当初の引脚は
現状とかなり相違し、やや奥深く落着いた感じを持つていたと想像さ
れる。

最後に今回の調査の結果とくに問題となる点を指摘すれば、まず第
1に斗拱組の方式が現状で考へていた時よりかなり古めかしくなつた
ことがあげられる。すなわち一手目の最上にあつて尾樋を受ける斗が
ない点は要防寺東塔、海電王寺小塔の斗拱組に通じ、同じ三手手先組物
でもそれをもつた薬師寺東塔、薬師坊小塔、宝生寺塔等とは相違する。
ここで一々の組物について述べる余駄はないが、この斗は開示の例
(東塔) でも明らかなように、元来前述通りの天井桁に組合つて内部
から延び出す通軸木の先端を受けるためのもので、尾樋はその通軸木
によつて支えられる。これを尾樋が直接大作附に掛る薬師寺、海電王
寺および本金堂の構造と比較すれば、尾樋の支点が柱頭より一手だけ
前方へ突出されたことになり、明らかに一步進んだ方式である。また
その結果、組物に対する尾樋の位置が高められて、二手先目の處でも
前者では尾樋と悉斗とが咬合つていたのに、肘木上にのる方式に変る
ことも第4回によつて明らかであろう。もちろんこうした構造の差が、
直ちに建立年次の前後を示すとは云えないが、薬師寺金堂の斗拱組
が古式に属する点は注目されてよい。

また尾樋の形式にしても、当初はほとんど反りをもたずに、とくに
上面は直線に近く、下面のみ先端を反らせた形であったと推定され
るので、これは海電王寺小塔の形式に近似し、当麻寺東塔以下の「反

り」および「増
し」をもつた尾
樋形式より古式
である。闇の尾
樋で上方のもの
が著しく前方へ
延び出した点も

海電王寺小塔、
薬師坊小塔など
と等しく、奈良

時代斗拱組の一
特色と思われ
る。ただし斗拱

組の様式比較で
は、本建物の場合、大斗を比較的大きく、反対に肘木を短かくして、
斗拱組全体が建物の大きさに比べて小じんまりした形にまとめられて
いる点は大きな特色で、薬師寺、海電王寺等の肘木の長い尾樋とした
斗拱組とは、かなり相違しているのである。

次に第2にあげられるのは金堂の創建当初から古材を用いたと思わ
れる点である。

本寺の建立事情についてはすでに多くの論考があるが、その際いつ
も問題になるのは、縁起に記された造営及び寄進者で、金堂について
も少僧那如室が作るとあることから、創建年次にいくつかの説を生じ

第4回 宝生寺塔三手手先組物

ている。しかし、いざれにしても本寺は、官の大寺と違つて財政的な裏付けにとぼしく、伽藍の建立に非常な困難を伴つたことは明らかで、現存遺構のみを取り上げても、講堂は平城宮朝集殿を移したことが、記録と現存古材の両者によつて確かめられるし、經藏は先年の解体修理の結果、一様分の建物古材を寄せ集めて作つたものであることが判明した。こうしたことからすると、建立の創めに古材が混入するには、本寺の場合むしろ通常であつたとさえいえるのであるが、金堂もその例に入るとすれば、これが一番中心になる建物だけに、その建立時期は他とあまり離らないものと考えたくなるのである。應真がなくなる763年までには講堂、食堂、僧房等が造立されているから、金堂の建立をやはりその頃とすれば、前記の斗拱組の様式が古式である点とも相応する。簡單な略報で本建物の建立年次にまでふれたが、これらは改めて報告書にまとめる積りである。

(藤木嘉吉)

四 内 部 装 飾

今回の工芸部の調査は、金堂内部の支輪版と紅葉に残されている文様、色彩などを調査の対象とした。これは、建築班が金堂の建築構造の調査をなすため特別に大勢りな足場を組立てたため、この足場を利用して、仰ぎ見ても到底みられない支輪板、天井板、紅葉などに残されている文様、色彩を調査したのである。金堂の現状により足場の關係から西側の支輪板、北面の西側よりの部分、南面の西側よりの支輪板や天井板は間近く調査することが不可能であつた。しかし、可能な範囲内まで接近して調査を行い、写真撮影も行つた。

左の図は、金堂内部の支輪版と紅葉に残されている文様、色彩などを調査の対象とした。これは、建築班が金堂の建築構造の調査をなすため特別に大勢りな足場を組立てたため、この足場を利用して、仰ぎ見ても到底みられない支輪板、天井板、紅葉などに残っている文様、色彩を調査したのである。金堂の現状により足場の關係から西側の支輪板、北面の西側よりの部分、南面の西側よりの支輪板や天井板は間近く調査することが不可能であつた。しかし、可能な範囲内まで接近して調査を行い、写真撮影も行つた。

左の図は、金堂内部の支輪版と紅葉に残されている文様、色彩などを調査の対象とした。これは、建築班が金堂の建築構造の調査をなすため特別に大勢りな足場を組立てたため、この足場を利用して、仰ぎ見ても到底みられない支輪板、天井板、紅葉などに残っている文様、色彩を調査したのである。金堂の現状により足場の關係から西側の支輪板、北面の西側よりの部分、南面の西側よりの支輪板や天井板は間近く調査することが不可能であつた。しかし、可能な範囲内まで接近して調査を行い、写真撮影も行つた。

第5回 金堂内部の支輪版と紅葉

支輪版は四隅の要形のものを除いて總数は15枚、紅葉は4枚である。これらの配置圖を示すと、第5圖の如くである。

〔一〕 支輪版

Aは東面で支輪版は二十枚を数えるが、全面剥落して全く不明なもの八枚、剥落し下方欠損しているもの二枚、他の十枚も剥落ひどく、描かれたものの全

様は到底判らない。しかしよく見ると供養仏らしきものの衣、坐像仏、蓮華、諸天、飛雲と想像されるものがみられる。Bは北面東よりの所で、九枚を数えるが、剥落して全く不明なるもの二枚、他の七枚には蓮華、宝相華、飛雲などがAと同様の状態において選取される。

Cは東面中央部の上背面上にある所で、十四枚あるが、全く不明なるものは一枚で、他の十三枚はA、B、D、E、F、G、H、I、J、K、Lの何れの場所よりも保存が良い。雲を描いたもの、上方に正面向きの仏坐像、下方に蓮華を描いたもの、宝相華を描いたものなどは色彩もわりとよく残っている。

Dは中尊の上背面上にあるが十五枚あり、全く不明なるもの一枚で、

他の十四枚はCの場合は鮮明ではないが、飛雲、仏、宝相華、蓮華、蓮臺などがみられる。

Eは千手觀音立像の上脛頭にあり、十四枚、全く不明なるもの五枚で他の九枚には仏、宝相華、蓮華などが鮮明度を大きめがつ見ら

れる。

Fは正面の西よりの所で九枚を数え全く不明なるものは四枚で他の五枚にはかすかながら宝相華、蓮華、飞雲、坐像仏などが見られる。Gは背面の場所で二十枚を数えるが十五枚は判別著しく図様は判明しない。此よりの五枚は鮮かに見られるが、その内四枚は褐色による

しない。

一枚に化仏らしきものがみとみられる現状である。

Iは千手觀音立像の前上方にあたる場所で十四枚を数えるが、大部分は判別して図様が判明しない。取て求めたならば飛雲らしきもの、蓮華、坐像仏らしきものがみられよう。

Jは中尊の前上方にあたる所で十五枚、この十五枚も殆んど判別ひどく、鮮かに部分に残るものから判別すれば化仏、蓮華などと思われる

るもの三枚を数えるのみである。

Kは薬師如來立像の前上方の場所にあたるが、十四枚あり全く不明なもの五枚、比較的よく残っているものは宝相華の一、二枚、雲中供養仏らしきもの一枚である。

Lは背面の東よりの場所で九枚あるが、判別著しく図様の判定が可能なものは二枚であろう。一枚は宝相華と思われ一枚は供養仏と考えられるものである。

以上が支輪板の概観であるが、C以外の場所は判別も基しく図様も正確にはつかめない。C とても他の場所に比較して鮮かに図様も残り色彩も色調を保ち得ている程度で、これをもつて当初の図様、色彩を決定するのは無理と云わねばなるまい。

Gに張原支輪板と思われる四枚があるが、これによつて色彩は参考

第6回 支輪板

になるが図様は四種類、即ち、宝相華の二種、仏立像、蓮經をもつ蓮葉に坐化仏の他に、雲中供養仙、飛雲などが考えられて図様はまづ六種類が採られたものと推測するのが妥当ではあるまい。

色彩はわりと厚い胡粉地に緑青、群青、丹、たいしや、黄などがその主調をなしていたと思われる。

支輪柱にも彩色がある。前面中央部はほ等間隔三段に区切り、さるに、上下方は中央をあけて胡粉地に緑青彩色をする。全部の支輪柱をかゝる方法で彩色しているが、ただ背外的にしの三本の支輪柱には八弁花を描いたものがあるが如何なる理由であるかわからない。その他、格闇、豪殿、柱頭、斗拱にも墨彩色が残っている。

〔二〕虹 塔

虹塔は四本あるが、下から仰ぎ見てはこれにどんな装飾が施されているかは全く見られないであろう。まことに美しい装飾が施されていると伝説的な話もあるたが、調査した結果はあまりにも無駄なる剥落の現状をしりえた。剥落と云うよりもむしろ散幕にすり落したと思われるほどに、少しの痕跡もとどかない面積がありにも多い。

略図に示す④の虹塔は東の面は剥落ひどく全く不明。それに反し西の面には当初の華麗さを偲ばせるものが残っていた。即ち、中央部に宝相華を大きく丸文様に描き、その左右に恰もその宝相華を抑げるかの形態に二重天を描く。剥落がひどく詳細は不明であるが、腹部にまたう雲はほど原型をとどめている。かなり厚い胡粉下地に墨で表線を細かに描き、色彩は茶青。文様は花菱文様が鮮明に出されているのは興味を引くものである。

この虹塔の下面を見ると、中央部には頭をつき合せた二尊を胡粉地に墨線で描く。南側の尊像は東向き、北側の尊像は西に顔を向ける。北側の尊像の上半身に衣の一部分が残っているが衣は墨線で示し緑青の濃淡によつて衣のしわを表現する手法である。両端には宝相華を描いているが、南端の宝相華は最もよく残っている。大きい図様でこれをシルエットリーの構成にしてまことに雄大であり華麗と云えよう。胡粉下地に緑青、群青、紫、朱、丹、黄、たいしやなどの豊富な色彩を駆使している。

④の虹塔の東よりの面は北端に宝相華がみられるのみでひどい剥落で図様の判定は出来ない。西よりの面も殆んど剥落し図様は明確にみられないが、迎面の如きものと天衣の綾えりの「ことき」ものが残つか乱れて残る。下面は④虹塔下面と同様に中央に頭をつき合せた二尊像を

第7図 虹塔 下面

描いてあるが、何れも上半身の輪郭のみで南よりの尊像は坐像らしい。一方、北よりの尊像は左手を胸に擎げているような形像と思われる。両端には④虹梁と同様に宝相華を描くが殆んど剥落してよく見られない。

⑤虹梁の東よりの面には、北端に仏坐像の後部のみが残っているほかは、何もみられない。西よりの面には北よりの部分に天衣の皺りがみられ仏坐像があり、顔面は剥落しているが胸部及び腰部は残っている。衣紋線は墨で書き衣紋は色の濃淡であらわす。両端には⑥⑦虹梁と同様に宝相華を描く。下面の中央には⑧⑨虹梁と同じく二尊像を描いたと思われるが、現在は衣の一部分がみられるのみである。両端には宝相華が描かれていたが今は剥落して殆んど見られない。

⑩虹梁は西側の虹梁で、この虹梁は他の三本の虹梁に比べて剥落が一番ひどい。東の面も西の面も共に全く剥落して何の模跡もなく、下而も中央に他の三本の虹梁に見られた如き尊像は見出せない。ただ僅かに蓮葉、一群の雲らしきものがみられるのみである。

（三）天井板

天井板には全部に花文様が見られる。これは下から仰ぎ見てもはつきりと見られるが、八弁花を四ますの中に描き出したもの、文様の外縁線は朱で、緑青、群青、紫、黄などの色彩が用いられている。可成りの部分にわたつて補色が施されているもので、どの部分が当初のものであるか正確にすることは些か困難であろう。文織版、虹梁に描かれた図様が教義的意味をもつたものであるかどうか、また、それらの図様が相關性をもつたものかどうか。たとえ教

義的意味をもつていたにしても、また、文織版、虹梁の図様が座間性をもつていたにしても、残存している國様の状況からは立論はむづかしい。余りにも剥落がひどすぎる、現状から推測すれば、そのかみにおいてはさぞかし華麗な内陣莊嚴であつただろう。（宇田公夫）

C 仏 像

勝沼提寺金堂諸像とは中央本尊の盧舍那仏坐像と左本尊の薬師如来立像と右本尊の千手觀音立像と、これ等をとり囲む毘沙門天の梵天帝釋天兩像と四天王一具像とであることはいうまでもないが、これ等に対する調査なり研究なりは今までにも幾度かおこなわれ、またその結果にもかなり見るべきものがあつた。したがつてこれ等に対する新しい研究といえば、よほど厳密な調査を重ねることによつて、これら奈良後期の仏像彫刻における動態の本質を捕えることと、勝沼提寺という寺の特徴性をできるだけ適確に押えてからなければならない。そこで当研究所としては先年からその新研究の一環として、その研究対象の精密調査をはじめたのであるが、那剣御門としては「この金堂諸像の調査をもつて、一応その基礎調査を終つたわけである。しかしこれがこの新研究としてはたしてどの程度の成果が上げられるか否かということは、ひとえに今後の研究をまたなければならぬと思う。ただしこれはすでに先年の調査によつてもたしかめられたことであるが、この寺の木造彫刻といわれる大部分のものが、もともと木肌をそのまま表面にさらしだけのものではなくて、かつてはその表面にかなり厚自の木削漆を被つていて、これはある觀方によつてはむしろ乾漆像とい

第8回 梵天空像

えなかつた。なおすでに昭和29年に調査を行つたものについても一部再調査を行つた。今回調査したものすべてについて述べる余裕はないので、ここでは特に古文書に限つて述べることにしたい。当寺に開拓した古文書が少くないことは当然であるが、それ以外に八幡善法寺、大覚寺（振津）、伝香寺（奈良）。その他の唐招提寺末寺の文書が多数残されており、又東大寺文書も十六通含まれている。これらの中には史料的価値の高いものも少くないが、特に善法寺文書は質量共に豊かである。純朴の唐招提寺文書は奈良時代以降、近世に至るまで多數残つてゐるが、主要なものは既に学界にも知られている。そこで一部の研究者にしか知られていないかつたこの善法寺文書の中から九点を選んで紹介することにしたい。なお割愛した他の文書中にも、内容的にこれと匹敵もしくは凌駕するものも少くないが、紙数の都合上他日の機会に譲ることとしている。

- ① 咸儀師慶源至直請取狀（天永二年三月廿四日）
唐堵 納直事
合附御定 之半於貳百四十疋以先日請文
麻布奉拾陸端代參百六十疋
- 右諸所請加付

天永二年三月廿四日

咸儀師慶源

今回調査を行つたのは大般若経（3部）、般経、講式、古文書その他で、写經および聖教類については日数の制約上次回に見送らざるを

12 善法寺藏文（正安二年十一月一日）

三 古文書經典等の調査

定義 等法寺

可早以旁勤寺領豐前國大野井庄、隈水代為供料所、為人下奉事。公

家武家繼承後、始自今年正安十一月一日、令勤務長日護摩供養法事。

一毎日愛染明王護摩一時刻不斷供養法

一毎日光明真言護摩三時

右割分重代相繼之所領、齊附弘陀、宛于長日行法之供料、合折我願者、

古今之通規、賢愚之所勸與、爰尚清者、為崇禪英之芳蹟、別于宗廟之

器用、所折者一天四海之淨業也。斯寡不憚焉、所念者花落御宮之安全

也、朝暮抽誠矣、叶神迹之敬、已逐羅敷之前進、叶、舉章之敬、所

全相在之朝退也、云神德、云、皇恩、可照可繩者歟、因茲、或以數關

之勤頤、寄附愚山、姑置長日之勤行、或建立二字之釋味、令止住僧尼、

同寄愚漢之上、重以寺領大野井庄、永寄愚山寺、以作乃實相更供料、

始自今日限未來限、每日可勤務或染明王護摩一時刻不斷供養法、此願

非他事、偏奉為、金輪寶主玉林安穩天下太平也、且為願主尚清息災安

福壽命民殖子孫繁昌也、以被供料之余興、每旦三時可令勤務光明真言

護摩、其故者、二時行法者為二端得說仙、先師先祖忽感長日密行之勝

利、宜現滿月內明之相好、今一時之護摩者、為圓滿一身之得慧、依此

行法之力、必謗西方極樂之往路、可列上品新成之誓願、仰願三宝諸如

來、衷惑我願、伏乞 八幡大菩薩納受此誠、相統門跡之手揚、不可成

科所之亂、止住寺院之體配、不可有行法之過帳、遙期慈尊之出世、

可願護摩之威靈、仍定願之狀如件

（後文、以下別の案文により補う）

正安式年子十一月一日

法印大和尚位在判

〔四〕 宗町幕府侍所司山名時氏奉書案（貞和二年十一月八日）

宇佐弥勒寺領豐前國金國保難拿行昌申、領家職事、訴狀請具如此、上

野弥次郎押第云、早任願掌所帶下知狀、沙汰村之、起居請之制、可

被注申之狀、依仰執達如付

貞和二年十一月八日 伊豆守在判

太宰少武殿

〔五〕 豊前國金國保難拿行昌申言上代案（貞和三年五月日）

八幡寺宇佐弥勒寺領豐前國金國保難拿行昌申重言上、

武早重經〔〔〔〕〕、且依蓮音寫、且任御新法旨、重被成下嚴密圖

下知、於年々脚附弘神用物者、如真致被札及空等用、云脚折時精

誠、以當保持丸名地頭曾羅勢四郎種助時、為同國上野地固弥次郎

輔臣、旁阿所、齊慕延行、青鏡西探隱州下知并領家地頭和与我

等、當名領家方田扇風敷等、就押領依請中、任難掌所帶下知狀、

可沙汰付由、去年貞和十一月、既被成上御奉書於守護大宰小武方、

依照遵行矣、你及添訪弘新、難堪子細事

謝起

一通 諸下知狀案貞和二年十一月八日

三通 須西下知并和与状等案貞和二年十一月三日同月廿一日

各先道華

一通 諸下知狀案貞和二年十一月八日

右輔世背熟西下知并和与中分狀、令押領當係內稱丸名之次第、先度良

言上事、依之任難掌所零下知狀、可沙汰付之由、去年十一月、御守護
大宰少貳、號被成下御奉書、無道行實之間、弘致亂妨詐欺、寺用關^モ、
勤行及違亂之奏、莫聽難測之次第也、然者草重延急速之御沙汰、且任
御折法之責、且以違背之端、被成下嚴重御教書、所押領之田農屋敷山
野等、悉被打賣寺家、至^{年々}^乞神用物等者、如員數被私處之^御、全
寺用、至輸世者、被君出其身、被行所為之責、終止向後領之奉願、
欲致御折尋之精誠矣、仍當言上如件

貞和三年五月
日

(5) 家町幕府侍所司山名持氏奉書案(貞和三年八月十八日)

〔御教書
重御下知案
吉原三郎右衛門久安事〕

豈前國全田保美掌□申、上野源次郎押領々家職由事、重訴狀如此、
先度被仰下之氣、不事行云々、不目可沙汰付難掌、裁起請之制、可被
往申、使箭猶候立者、可有其科之狀、依仰執達如件

貞和三年八月十八日 伊豆守 在判

大宰少貳狀

(6) 尼円妙屋敷券(貞治六年十一月十九日)

壳痕 屋敷券所
在城内東端口^{一尺五寸五分}

四至限西大通^ノ
限南限目^ノ
限北限日^ノ

右件の鬼敷者、故対馬法橋基手より、息女尼円妙諭得ところなり、
しかるを要用あるによて、宛直致^シ貢參百文、該後法眼御房にさりわ

たたしてまつるものなり、本文書者建武歸亂之時、若頭の御倉にをき
て、みなみな令粉失候早、仍為後代、宮寺國師田所之區判を相別候上
著、更ニわづらひあるへからず候、但本役には、毎年封戸米四升より
ほかにはさたなく候、仍売券之状如件
貞治六年十一月十九日

尼円妙(花押)

大法師宗源(花押)

左衛門點平秀輔(花押)

(7) 細川政元總政制札案(永正元年九月廿日)

〔御教書
御法總政
細川政元奉書案 正文ハ幕中之口〕

他政法之事

一為 上意并體形之儀、天下一同之總政也

一綿布類十二ヶ月免置月

一金物廿ヶ月

一武具廿四ヶ月

一父子二人子迄行上者、賃物借錢米等、不可有別沙汰者也

右此条々、有違背輩者、發向在所、一段可為罰科者也、仍所定如
件

永正元年九月廿日 在原朝臣長治 在判

(8) 家町幕府奉行人連雲事密案(十月一日—永正元年^ノ)

〔御法總政
公方領下知案^ノ六月^ノ在之〕

就今度施設之儀、所々御氏等、号土一揆、社辺境内以下及物

云々

語道源次第也。所詮於質物者、守高札之旨、至諸借物者、云錢主、云
借主、金參酒、任曉書可給調下知、此上猶背制法、有錢意之底者、可
毋嚴科之上者、存知其段、可相触四ヶ鄉并諸神頭之由、所被仰出之狀
如件

十月一日

行房在賀
貞院在賀

石清水八幡宮

鹽社諸神人中

〔同〕京町寫屏奉行人連署制札案（永正元年十月一日）

〔同〕

〔同〕

〔同〕

定
施政法

石清水八幡宮山上山下境内并諸神頭等

一土貯以下於質物者、以糧使之儀、白燈司取之事

一至諸借物本物已下者、云錢主、云借主、金參酒、可解沙法事

有条々、被定置之上者、若有肯規矩之策者、可免嚴科之由、所被仰下
也、仍下知如件

永正元年十一月一日

散役三善朝臣在賀

中守平朝臣在賀

（同中也）

唐招提寺寺合調査委員会

唐招提寺は、その寺域内より発見した屋瓦類を、多量に収集し保存
している。この資料は、奈良時代より江戸時代にいたる各時代の屋瓦
を大体網羅しており、創建以来今まで、法燈の歴史の中につ
た同寺の各時代に於ける建築の遺物や修理を、ひいては寺自体の消長
をしめす資料である。今回の総合調査にあたっては、昭和32年9月に
行つた予備調査の結果を基として、同寺に所蔵する全資料を整理分類
し、さらに寺外の蒐集品をも参照して、唐招提寺所用屋瓦の分類と型
式設定を行つた。

唐招提寺が現在保存している屋瓦は、主として軒丸瓦（132個体）
と軒平瓦（150個体）であるが、他に若干の丸瓦・半瓦・翫瓦・
鬼瓦・鳥窓・雁振・雨戸瓦などの道具瓦を含んでいる。これらの資料
のうち、礼堂・宝藏の修理工事や兩大門の再建工事の際に出土したも
のがややまとまつてゐる他は、個々に寺域内の各所から発見したもの
が大部分を占め、さらに最古まで使用されていた屋瓦で、修理の際に
鋸などを発見して、保存用として取り除したものも含んでいる。
軒丸・軒平瓦のうち、奈良時代のものはそれぞれ32種と2種である。
そのうち第9回の珠文縁複井八葉連華文軒丸瓦と、珠文縁均齊唐草
文軒平瓦の一組が最も顕著である。共に大粒の蓮子や珠文を有し、東
大寺式と呼ばれる軒瓦の文様の先駆的な型式を示している。このこと
は、個体数の比率を重視できないとしても、この型式のものが、同寺
所蔵の奈良時代軒瓦中で最も多いことと共に、創建時の製作を傍証す

るのではなかろうか。

唐招提寺に重圓文系の組合せの軒瓦が存在することは、從来から知られており、三重圓文軒丸瓦2種、圓重圓文軒丸瓦1種と、それと組合わさる重圓文軒平瓦2種が見られる。その軒丸瓦はいずれも瓦当面背面の作りが、創建時の軒丸瓦より粗雑であり、無彫の軒平瓦も同様であつて、皆創建以降の製作と見られる。ただ、長岡宮跡出土の同系軒瓦と較べて、本寺のものは瓦当面の彫りが深く、太く続いた圓線を有し、長岡宮跡のものよりは下らないであろう（第9図2）。また、創建以降の奈良時代のものとして、三彩釉を施した軒丸・軒平瓦がある。两者共軒かい黄灰色の素地に、酒綠色、白色、褐色の鉢袖を施した小形の瓦である。これに對応すると思われる三彩釉の薄手小形の丸・平瓦も発掘されているが、その場所がすべて講堂の周辺、特にその北方であることは注目に値する。

以上の創建以降の華頂後期末の瓦の他に、創建以前の時期の瓦もまた発見されている。その一是唐草文様の中房の大きい板井八葉蓮花文軒丸瓦と、廻雨文珠文様扁行唐草文軒平瓦の組合せ（第9図3）のものである。これは唐招提寺創建以前に、この地にかかる瓦を使用した種物が存在したことを示すもの。他の一は平城宮式と呼ばれる型式の一器で、そのうちには本寺の講堂としてさられた平城宮の御薬堂の瓦も含まれているであろう。

平安時代に屬する軒丸瓦は16種、同軒平瓦は19種で各時期のものが、あるが、第9図5の軒丸瓦が、創建時のものを施した文様を有するもので、他に見るべきもののが少ない。

鎌倉時代に屬する軒丸瓦には茎葉文、花菱文、宝珠文、巴文、文字文等9種、軒平瓦には唐草文、劍頭文、連珠文、巴文、文字文等24種がある。第10図6の左端三巴文軒丸瓦と、珠文様唐草文軒平瓦は鎌倉

前期の一組であり、特にその軒瓦は興福寺における鎌久年間の型式で、西大寺東塔にみられる建保年間の型式との間に似る文様を有するから、礼堂の施設された建保年間頃の製作となし得る。第10圖7の寺名を表わした一組や、8の蓮華文と唐草文の一組は鎌倉後期のもので、金堂東廻尾を過った元亨年間頃に位置づけ得るであろうか。

室町時代以降の軒丸瓦は18種、同軒平瓦は32種があり、うち室町時代の軒丸瓦は巴文、文字文等7種、軒平瓦は唐草文、流水文、巴側頭文、文字文等23種を数える。第10圖9の左腰三巴文軒丸瓦と流水文軒平瓦との一組は、南都諸大寺にみる応永年間の型式と同じものである。最後に江戸時代の瓦は稀薄少く、幕府による元禄年間の修理の際のものが大半を占める。第10圖10の寺名を表わした一組はその一例である。その他の道具瓦の中では、鬼瓦の数の多いことが顕著である。11個

体の鬼瓦のうち7個体は奈良後醍醐天皇のものであり、高さ43cmからいのものから26cmのものまで調べられ、このうち室町出土のそれは怪獣の全身をあらわした型式で、平城宮跡や薬師寺出土の型式の一段くすぐれたものである。

このほか南大門再建工事に伴つて発見された門檻脚瓦は、直径25cm、厚さ2cmの円板状のもので、これに右斜を向いた腰面をあらわした珍らしいもので、4ヶ所以上の打穴が穿たれている。極先瓦とするには大きく、出土場所が南大門であることから三種造り切妻の袖下筋の鼻についた飾り瓦と考えた。

以上唐招提寺に所蔵する瓦の主要なものについて概観した。個々の資料に関する詳細な記述については後日の本報告の際に行う予定である。

(園田茂也)

彫刻の調査と研究経過

美術工芸研究室・彫刻

一、後醍醐天皇の研究

後醍醐天皇が東大寺の復興事業を推進するためには、諸國で働いた仕事の数々は、彼の南朝開拓貢作書

に記載されており、その中で、いまにこうかがうことがでる。たゞその中で、いまの岡山県に含まれている鷲中と鷲前の中のことは、例えば作番にも

鷲中別所 沙土塗

古川御守 神宮寺寺井御守

唐物堂

唐物堂

唐物堂

河内大寺屋

河内大寺屋

河内大寺屋

河内大寺屋

とあるだけで、これ等がはたしてどうにあつたものが、あまり明らかにされていなかつた。しかしこの重複研究においてはかなり早くから、鷲中別所をい

鉄湯釜（岡山縣鷲前町）

二、鷲正善穀の研究

この箇中、備前國のことはまだわからぬところがあるが、三十五年忠に於ては、主としてこの兩國のことを調べてみた。その結果とくに、まず第一に吉備津神社にある十一面の青

荷面の中の八面は、いわゆる藤原和様の古い傳承をかなりよく伝えたものであるがやはり難易居間頃の一十五面從業頭の一端であることが推定され、したがつてこれがおそらく重複による鷲中別所淨土堂に関する遺品ではないかと推察された。次の第三は、金山寺（岡山市金山寺）にかなり數多く傳つてゐる古文書類で、この中に建久四年（一一九三）六月の金山寺住持解一通があり、これを地図に重複白墨の外題と花押があることによつて、この金山寺が重複による「（藤原）岡中善穀作金（金）」の中の寺であることが知られた。なお第三は、龍藏寺延（鷲尾寺延）の鉄湯釜で、これは往々尺一寸余（三尺五寸のきわめて大方なものであるばかりでなく、その恰好や造形が鷲防院寺の鉄湯釜にひじょうによく似ていて、これがやはり善穀かりのものではないかとうことが考へられたわけである。これ等はとにかくも善穀先生に貴重な資料を加え得たものと信じて置かない。

岡正善穀の研究も重複研究と同様にその研究対象がじつとうに豊多るので、その基調資料の調査だけにでもなかなかひまむるわけであるが、本三十五年においてはさほどのようなるを調査した。

すおもその第一は、假名の本居宣長の大著『天人交際論』で、その書傳『天人交際論』によると、延喜二年（一二七六）九月に佐藤實春が御宿の命によって、通つたものと傳えられてゐるが、したかにその様子は古く、例のあまり肥満してしない、すつきりとした形をした大黒天で、作りもかなり写実的で、しかもきわめておだやかな手法をもつて、かえつて生彩のある表現をなしているのである。なんの如き像には、その後内にかなり多くの頃物があるらしい。

に寂蔵の後の日暮や性海などによつて造られた清涼寺
や秋葉院などもあつたが、いまは見るまでもなく森
はててゐる。しかしこの寺はなんといつても平安朝
初期に義僧正などの住した名刹であり、また中世以
降はによる眞言律家の教をよく傳えたところで
いまはほとんど知る人もないが、ここにかなり数多
くの中世の在籍石塔等が放置されている。本年度は
ただそれ等の存在を確認した程度に止めたが、今後確

阿弥陀如来像をはじめとして、六波羅蜜多本堂の藥師如來像、元興寺極樂坊本堂の阿彌陀如來像、法隆寺講堂の藥師三尊像、藥師の文殊菩薩像、淨瑠璃寺の藥師如來像、興福寺の般若塔上吉祥像等の如きなものである。これ等によつて和歌規則のもつ絶妙な柔軟のある表現といふものが、様式的的にかに免解していつたものであるとか、そんな様式をつくり上げている術の構成²はたしてどんな道作を施す

聖母太子像頭部內面（元祐寺無量劫）

で、次の機会にそれ等をみたすることができる人が多く期待している。次の第二は、元興寺極楽坊の相続

た。これも今後の調査に期待すると、一歩が大きめ

頭點距離の研究

大圣天像(西大寺)

機会を見つけてよくそれ等の石塔を調査したいと思つてゐる。云々

の第四は、三承原下の律宗開祖寺院

3

いのか、そしてそんな歴史をもとめた時代の
感覚が、その歴史なり自家なりがどうして始つたか
ということを考えても、これには「ますや
といひ結果を出すわけにはしないが、もうする
一歩多くの結果作例の比較によつて、かなり面白い結
果がでるのではないかと期待している。

四、鎌倉時代における院派は西の研究

附 日本彫刻作家研究一般

西派美術における院派を師の研究は、前に述べた
とくに、主として現存作例のある作家すなわち院
賢、院矩、院智、院鷲、院通、院周、院妙、
院修、院昇、院義、院榮、院金、院凡、院寧、
院貞、院興、院廣、院重等について、これを記した
ものが多いためであるが、本年度においてはむしろこれ
等作家の史料を検討することにつとめた。

たゞこの研究に進展するものといい、本年三月
(一一二)に仁時院尼が造った御所御佛堂像(京都
真言西院持田)の大木本尊像、いつ頃造られたか
のかわからぬ。ものから、鎌倉の名匠院派の手か
けた正寿院(京都府宇治田原)の不動明王像等を
調査した。この中で後醍醐の不動明王像はその様子を
法界にわたりて醍醐寺の不動明王像はよく似てい
た。これが何一家の手に成つたものであるかは、
だれにでも必ずしもわかる。ことにその色彩等をとじ
やすらとなしする云う表現や、刀実を好みにした
手法等、院職をもとめた幾多色彩などは、やはり後
醍醐の特色をよくかしたものといわなければならない
だろ。ながらの像はは依然の真徳の跡はないが、
ついゆきのであるが、本年度においてはむしろこれ
等作家の史料を検討することにつとめた。

五、その他の調査研究

1. 筑寺研究

笠寺とは、いまでい寺といい、奈良和泉井吉野等に
ある名跡で、世俗に笠寺神として知られている。こ
の方はかつて古く笠寺氏代に笠寺良房等院と呼ぶれた
もので、一説には東大寺の開山良房等正の出生地と
し傳承されている。この寺の本尊は像高六尺四寸八
分の一木造りの藥師如来立像で、平安初期の頭廻と
してかなり見るべきものであることは、すでに一部
のものに知られて居る。この点にまだ少し注目す
べき文化財があるので、近見市に委嘱によつて、そ
れを一応調査した。その主なる品目は次の通りで
ある。

2. 伽藍研究

3. 墓碑研究

4. 葬儀研究

5. 丹青研究

6. 丹青研究

7. 丹青研究

8. 丹青研究

9. 丹青研究

10. 丹青研究

11. 丹青研究

12. 丹青研究

（概述）

なおこの寺の鎮守笠山神社の神像は、興津草神と興津稻荷との二具像で、これが享保十七年（一七三二）に清水隆慶によつて造られたものであることが知られている。

2、元性院調査

元性院とは、京都府宇治田原町奥山田にある無名の小刹であるが、ここに鎌倉時代の年記がある大般若経を伝えてゐるとのことで、そのの庄職佐藤齊宏師の要請によつてその一部を調査したが、たしかにその中には永治（延一一四〇）をはじめとして、寛仁（一一六七）、嘉定元年（一一六九）、治承四年（一一八〇）等の奥書きがあるものがかなりあつて、これはまた毎日書きくりと調査をしなければならないものだと思ふ。

3、西吉野村調査

この調査は奈良県吉野郡西吉野村の教育委員会の要請によつたもので、同村内の立川渡辻堂、正体寺（三井寺）、圓光寺（慈光寺）等の丈把間をこぐ測量に調査した。この中で法華すぐらものは興光寺の定専上人坐像で、これは本尊釋迦、脇侍二足丈のまこと日本的な肖像であつて、現立するおそらく室町初期を下るものではないと思われる。したがつてこの像は真宗開基の肖像としても古く、またすぐれたものといわなければならぬだらう。

昭和35年度調査研究概況

1. 唐招提寺総合調査（美術工芸、建造物、歴史研究室）
2. 平城宮跡発掘調査（建造物、歴史研究室）

以上の調査については本文参照。

3. 大和金里剣の調査研究（歴史、建造物研究室）

平城宮の条坊制を明にするために、筆に京内に止らず、広く大和国の条坊制と関連させて研究を進めることが重要である。このためまず大和國の条坊制資料を蒐集整理することとしたが、35年度においては、特にパンチカード利用による文書資料の蒐集に主力を注いだ。カード作成が終ったのは大日本古文書中の東大寺文書である。

4. 電気比較法による埋藏道路の調査（建造物、歴史研究室）

この調査は電気比較法によつて地下埋藏道路の状態を推定しようとするもので、測定には関西電機製作所製し「10巻大地比較法測定器」を使用した。昭和35年4月、既知の道路（既に発掘調査済）飛鳥寺から着手した。

その目的は電気探査の結果と発掘調査の結果とを照合することにより、既知の道路がどのような敷地又は図表となつて現われるかを検討するので程度検査が可能であるかを検討するにあつた。その結果か

なり有効な補助手段になり得ると考えられるに至つた。そこで昭和35年12月東大寺知足院庭園道路を探査した所、流の石組の下方に於いて地山が約50㌢下がつており、確か流れ様のものと存するを確定した後、「泥炭層によりその実際の状態をも確認し得た」として昭和36年1月金剛院庭園道路で探査を行つたが、現存する地を含めて、回廊池はかつて地下までのびていたことが判明した。この結果は同寺南端の古国にも適合するものであった。現在の所道路の電気探査はまだ実験段階にあり、解説の結果得られた電気的数値と既構との相関関係を求めるには至つていなかが、今後数多くの事例に当れば、やがてより正確な結果が期待されるものと考えられる。

5. 仁和寺の研究（美術工芸、建造物、歴史研究室）

昭和33・34年度間にわたり、仁和寺所蔵古文書、唱教經の調査を行つて來たが、35年度においては、文部省科学研究費交付金を得て、京都国立博物館に協力して広く仁和寺の調査を行つた（研究題目「仁和寺における美術史料の調査とその研究」研究代表者：京都市立博物館学芸課長柳澤敬郎氏）。当研究所より参加したのは森嶋、杉山信三、守田公夫、田中忠の四名で、それぞれに仁和寺境内および庭園茶室の実測、仁和寺南院（常楽院）、道路発掘、工具品、古文書等資料の調査研究を行つた。

1. 美術工芸研究室・印刷
図書は新規の」とある。

2. 美術工芸研究室・工芸
昭和29年上芸術が発見し同三十六年三月開室に指
定された新規課室等。スリ本年度は材質の物理学
的、化学的検討を加え、大陸との連携性を実現し得
て圖文の教科授業に導く達した。

能衣裳と小袖の研究の一環として伊丹市の前田家
に所蔵されてある能衣裳、能面の調査を実施し、實
測、撮影、調査作成をなした。前田家の衣裳および
面は年代的には江戸初期より中期頃迄の作品であ
るが、保存よく能衣裳もれ、その年代の代表的作例
と見られるのが多く近世初期における能衣裳、能
面の好資料である。

又前々より含利島および別子の研究を行つてゐる
が、35年度において引続き別子研究を進めた。こ
のほか、伊勢市教育委員会の依頼により伊勢市内の
美術工芸品の調査をした。

3. 足跡研究室・遺跡調査

遺跡研究室は、かねてから南都諸
大寺等地調査、小畠塗川及びその流域による建築應
用の研究を行つてまたが、昭和35年度に於ては左記
調査を行つた。

4月 知見山周囲の古跡調査

5月 道賀県庄原町佐治家所蔵小畠塗川周辺古跡
古文書等調査

昭和35年春築城史調査

6月 舞鶴寺旧境内実地調査

7月 1日 一乗院（奈良盆地）実地調査

7月-9月 春日神社境内を含む奈良公園実地調査

7月-12月 奈良探査田境内実地調査

8月 二条城（丸の内）実地調査

9月 大安寺大油瓶塗御殿調査（大油瓶方丈廻
廻廊壁上部に開きした調査）

昭和36年3月 桑原山（西方坂山城跡）実地調査

4. 建築物調査室・建築

(1) 解体修理に付う調査
法隆寺東方に亘り坂道、奈良自然教育委員会によつて
東宮の解体修理が行はれ、柴堂室はそれに協力した。
東宮の古木から昭和小字房の藤枝が発見され、その
結果、東宮（大内別）の1層2間に対し、又官組の
構造をもつ1層3間の小字房が知られ、また東側に
よつて、昭和小字房は、東宮により近い位置に平野に
建てられていたものが、室町時代に東に難され、さ
らに慶長5年に現在地に遷築を縮少して再建された
ことが明らかになつた。

同西寺的跡の調査

指定史蹟西寺の指定地域に接して、その東側に附
大油瓶塗御殿が行われ、漆石を発見した。京
都市教育委員会の委嘱をうけて、設置地点のみに限り、35
年6月に建設、考古共同して調査した。調査は延光
講堂の東にあり、南北に長い奥間3間の建物の一部
でこれは簡明と考えられる。

調査結果、南北一直線上に斯・金堂が、その西に
南北丸柱基礎をもつ仏殿があり、また金堂北にも一
建物があることが明らかになつた。なお、類例をみ
ない、門柱も残るや東面の隅木焉豆が出土した。

5. 歴史研究室・考古
新宮寺の發掘調査
大坂府富田林市新宮寺は、昭和の予備調査によ
つて古墳基壇が発見されていたが、昭和35年9・10
月、大坂府教育委員会によつて本調査が行われ、考
古・建築室内がこれにお加した。

発掘結果、南北一直線上に斯・金堂が、その西に
南北丸柱基礎をもつ仏殿があり、また金堂北にも一
建物があることが明らかになつた。なお、類例をみ
ない、門柱も残るや東面の隅木焉豆が出土した。

6. 歴史研究室・古文書

調査研究を行つた。また西大寺古文書の經典類の
調査研究を行つた。また西大寺古文書の調査にも繋げ
し、「一編について調査、写真撮影を行つた。7月に
は源氏新聞社による高野山文化財調査を実施し、
宝篋印、宝印、板塗院、無量光院、常善院、天地
院、不動院その他の古文書典籍を調査したが、多
くの障壁が見られた。12月には文化財保護委員会に
ある東寺御影堂の宝版一切調査に協力した。

奈良国立文化財研究所要項

研究發表

A 講演

1. 昭和三十五年六月四日(於本所)
最近の平城宮跡発掘調査について2. 昭和三十五年八月二十七日(於現地)
平城宮跡発掘調査報告会3. 昭和三十五年十二月十六日(於現地)
平城宮跡発掘調査報告会

B 展観

1. 昭和三十五年六月四日(於本所)
手向山神社宝物および平城宮跡発掘出土遺物2. 昭和三十五年八月二十七日(於現地)
平城宮跡発掘出土遺物3. 昭和三十五年十二月十六日(於現地)
平城宮跡発掘出土遺物

研究成績刊行物

昭和二十九年度

奈良国立文化財研究所学報第一冊(仏舎利塔の研究)

奈良国立文化財研究所史料第一冊(南朝阿弥陀作菩薩像後編)

奈良国立文化財研究所史料第三冊(文化史編著者)

奈良国立文化財研究所史料第一冊(西大寺釈迦塔記集成)

奈良国立文化財研究所学報第四冊(奈良時代僧坊の研究)

第六冊(景福寺発掘調査報告)

第七冊(興福寺貞空発掘調査報告)

第八冊(文化史論叢)

第九冊(平城宮跡第一次発掘調査報告)

第十冊(平城宮跡第二次発掘調査報告)

第十一冊(平城宮跡第三次発掘調査報告)

第十二冊(平城宮跡第四次発掘調査報告)

第十三冊(平城宮跡第五次発掘調査報告)

昭和三十五年度文部省科学研究費交付金による研究

| 研究課題 | 日本に現存する朝鮮美術、建築、考古学資料の整理と研究、文化史上における興正苦蘇教尊的研究特にその造寺道場を中心として | 研究代表者 | 交付金の種類 | |
|------|--|-----------|--------|---------|
| | | | 総合研究 | 研究代表者 |
| 小林 勝 | 藤田亮策 | 三〇〇〇,〇〇〇円 | 藤田亮策 | 三〇〇〇円 |
| 小林 勝 | 藤田亮策 | 九〇,〇〇〇円 | 藤田亮策 | 九〇,〇〇〇円 |

| 年 度 | 名 称 | 担当者名 | 研究課題 | |
|---------|------------------------------|-------|-------|-------|
| | | | 各個研究 | 研究代表者 |
| 昭和二十九年度 | 奈良国立文化財研究所学報第一冊(仏舎利塔の研究) | 小林 勝 | 小林 勝 | 小林 勝 |
| 昭和三十年度 | 奈良国立文化財研究所史料第一冊(南朝阿彌陀作菩薩像後編) | 田沢 伸 | 田中一郎 | 田中一郎 |
| 昭和三十一年度 | 奈良国立文化財研究所史料第一冊(西大寺釈迦塔記集成) | 森 順 | 小林 勝 | 小林 勝 |
| 昭和三十二年度 | 奈良時代僧坊の研究 | 田中一郎 | 田中一郎 | 田中一郎 |
| 昭和三十三年度 | 第六冊(景福寺発掘調査報告) | 坪井 清足 | 坪井 清足 | 坪井 清足 |
| 昭和三十四年度 | 第七冊(興福寺貞空発掘調査報告) | 坪井 清足 | 坪井 清足 | 坪井 清足 |
| 昭和三十五年度 | 第八冊(文化史論叢) | 坪井 清足 | 坪井 清足 | 坪井 清足 |
| | 第九冊(平城宮跡第一次発掘調査報告) | 坪井 清足 | 坪井 清足 | 坪井 清足 |
| | 第十冊(平城宮跡第二次発掘調査報告) | 坪井 清足 | 坪井 清足 | 坪井 清足 |
| | 第十一冊(平城宮跡第三次発掘調査報告) | 坪井 清足 | 坪井 清足 | 坪井 清足 |
| | 第十二冊(平城宮跡第四次発掘調査報告) | 坪井 清足 | 坪井 清足 | 坪井 清足 |
| | 第十三冊(平城宮跡第五次発掘調査報告) | 坪井 清足 | 坪井 清足 | 坪井 清足 |

表をなす。

2. 日本文化研究所の名義及び実質は、左の通りとする。

| 名 | 称 | 位 | 賞 |
|-----------|-----|-----|---|
| 東京国立文化研究所 | 東京市 | 東京市 | |
| 東京国立文化研究所 | 東京市 | 東京市 | |

3. 国立文部省は、國立文部省には文部省を冠することができる。

4. 国立文部省が及ぼす文部省の問題

相談は、實質上問題としない。

(文部省の問題としない)

(昭和十七年三月二十五日)

(文化財保護委員会規則第五号)

(沿革一九六二年五月改正)

(沿革一九六二年五月改正)

(文部省立文部省の問題)

第一項 奈良國立文部省大河の市長事務所
を改めさせたため、新設事務所の設立
を計らう。

第二項 市長事務所においては、左の事務をつ
ける。

(文部省の事務を改めさせたため、新設事務所の設立)

第三項 市長事務所においては、左の事務をつ
ける。

この規則は昭和十七年四月一日から施行
する。

一、別に文部省議定書を以てから施行する
ことを除く。

二、別に文部省議定書を以てから施行する
ことを除く。

こと。

2. 文部省議定書を以てから施行するもの

は、通じること。

3. 調査及び収入の予算、決算その他の費

計に関するもの。

4. 日本政府が文部省の問題に関するこ

と。

5. 文部省の組織構成に関するもの。

6. 文部省に属するものほか、他の機

関に属しない事務を規定するもの。

(文部省の事務を改めさせたため、新設事務所の設立)

(沿革一九六二年五月改正)

(沿革一九六二年五月改正)

(文部省立文部省の問題)

第一項 奈良國立文部省大河の市長事務所
を改めさせたため、新設事務所の設立

を計らう。

第二項 市長事務所においては、左の事務をつ

ける。

(文部省の事務を改めさせたため、新設事務所の設立)

第三項 市長事務所においては、左の事務をつ

ける。

この規則は昭和十七年四月一日から施行

する。

(文部省の事務を改めさせたため、新設事務所の設立)

職員

(昭和三十六年五月三十日)

氏名

職員

ANNUAL BULLETIN
OF
NARA NATIONAL RESEARCH INSTITUTE
OF CULTURAL PROPERTIES

1961

CONTENTS

| | page |
|---|------|
| Preface | 1 |
| Summary of General Investigations of the Toshodaiji Temple | 2 |
| Summary of the 3rd, 4th and 5th Surveys of the Nara Imperial Palace Site during 1960 | 18 |
| Summary of Survey of the "Zuto" Buddhist Mound | 28 |
| Research and Study of Sculptures | 38 |
| Activities of the Institute during 1961 | 35 |
| Organization of the Institute | 40 |

PLATES

The Toshodaiji Temple: Interior of Main Hall.

- : Ridge-end Ornament Tiles, Main Hall.
- : Western Half of Front Side, Main Hall.
- : Painted Decorations on Beams, Bracket-
arms and Ceilings, Main Hall.
- : Bodhisattvas painted underside of Tie-
arms, Main Hall.

Inscribed Wooden Slips discovered at the Nara Imperial Palace
Site.

Published by

Nara National Research Institute of Cultural Properties

Nara, 1961

ANNUAL BULLETIN
OF
NARA NATIONAL RESERCH INSTITUYE
OF CULTURAL PROPERTIES

1961

CONTENTS

Page

| | |
|--|----|
| Preface | 1 |
| Summary of eneral Investigations of the Toshodaiji Templ | 2 |
| Summary of the 3 rd 4 th and 5 th Surveys of the Nara Imperial Palace Site during 1960 | 18 |
| Summary of Survey of the "Zuto" Buddhist Mound | 28 |
| Research and Study of Sculptures | 35 |
| Activities of the Institute during 1961 | 38 |
| Organization of the Insititute | 40 |

PLATES

The Toshodaiji Temple : Interior of Main Hall.

: Ridge-end Ornament Tiles, Main Hall.

: Western Half of Front Side, Main Hall.

: Painted Decorations on Beams, Bracketarms and
Ceilings, Main Hall.

: Bodhisattvas painted underside of Tieams, Main Hall.

Inscribed Wooden Slips discovered at the Nara Imperial Palace Site.

Published by

Nara National Research Institute of Cultural Properties

Nara, 1961